

# 「大阪子ども調査」結果の概要

2014年2月

阿部 彩（国立社会保障・人口問題研究所）

埋橋孝文（同志社大学社会学部）

矢野裕俊（武庫川女子大学文学部）

# 大阪子ども調査 結果の概要

この度、「大阪子ども調査」の結果の概要がまとまりましたので、ここにご報告いたします。

阿部 彩(国立社会保障・人口問題研究所)、埋橋孝文(同志社大学)、矢野裕俊(武庫川女子大学)

## 調査の概要

実施対象者：大阪市内の公立小学校51校の小学5年生、公立中学校31校の中学2年生およびその保護者

抽出方法：調査対象となった学校は、大阪市教育委員会事務局が各区より1～2校、児童数・生徒数を考慮して抽出した。

実施年月：平成24(2012)年11月

実施方法：各学級内で子ども票・保護者票をセットで配布、無記名、自記式。各学校の教室にて、子ども票と保護者票を配布。家庭に持ち帰り、子ども票は児童が、保護者票は主な保護者に記入してもらった。調査票は、子ども票、保護者票それぞれに密封し、さらにその二つの封筒を世帯毎の封筒に密封し、学校に提出。学校および教師は封筒を密封したまま同志社大学に郵送した。

回収状況：

		子ども票	保護者票
小学校	対象児童数	4154	4154
	有効回答数	3152	3149
	有効回答率	76%	76%
中学校	対象生徒数	4199	4199
	有効回答数	2880	2875
	有効回答率	69%	68%

子ども票と保護者票がマッチした票は、小学校3,129票、中学校2,851票でした。

調査回答者のプロフィール：

	子ども票			保護者票 (回答した人の属性)					
	男子	女子	性別未記入	母親	父親	祖母	祖父	その他	無回答
小学生	1525	1536	91	2804	219	20	4	5	97
	48%	49%	3%	89%	7%	0.6%	0.1%	0.2%	3%
中学生	1316	1520	44	2517	218	16	3	7	114
	46%	53%	2%	88%	8%	0.6%	0.1%	0.2%	4%

調査回答者の世帯状況：

	世帯タイプ				所得階層※1 ( <small>貧困</small> <small>非貧困</small> )		所得階層(3層)※2		
	二親世帯	母子世帯	父子世帯	その他+不明	貧困層	非貧困層	低	中	高
小学生	2532	484	56	57	323	2368	898	897	896
	81%	15%	2%	2%	12%	88%	33%	33%	33%
中学生	2186	550	61	54	326	2079	799	803	803
	77%	19%	2%	2%	14%	86%	33%	33%	33%

※1 貧困層=世帯等価所得(世帯の合算所得を世帯人数で調整した値)が125万円以下の世帯  
(125万円は厚生労働省「平成22年国民生活基礎調査」において推計された相対的貧困基準)

※2 所得階層(3層)は、小学校の回答者、中学校の回答者をそれぞれ世帯等価所得によって等分に3分割したもの

注：クロス表の下に $\chi^2$ 乗検定による $\chi^2$ 乗値とp値を記載する。 $\chi^2$ 乗検定とは、クロス表において二つの変数が関連しているか否かを調べる統計手法である。p値が小さいほど統計的に有意な差があり、通常、0.1以下であれば統計的に有意な差があると見なされる。

本調査の実施主体：調査は、文部科学省科学研究費補助金「貧困に対する子どものコンピテンシーをはぐくむ福祉・教育プログラム開発」(研究代表者：埋橋孝文 同志社大学教授)の一環として行ったものです。学校や教育委員会にはアンケートの配布について協力していただきましたが、この調査は学校や教育委員会がおこなったものではありません。

研究チーム：埋橋孝文(同志社大学教授)、阿部彩(国立社会保障・人口問題研究所部長)、  
矢野裕俊(武庫川女子大学教授)

本調査に関するお問い合わせ：国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部長 阿部 彩

電話：03-3595-2984 E-mail：ayaabe@ipss.go.jp

# 1. 将来の夢

将来の夢を持つ割合は、子どもの年齢とともに減る傾向にあります。小学5年生では、79%が夢をもっていますが、中学2年生となると、その割合は59%となります。また、女子のほうが男子よりも夢をもっている割合が高く、中学生の男子では、約半数しか夢を持っていません。

図1-1 小学5年生

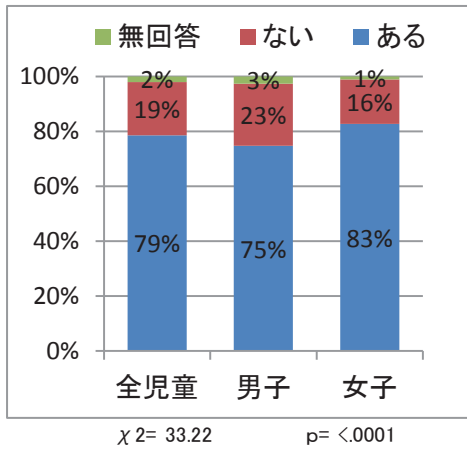
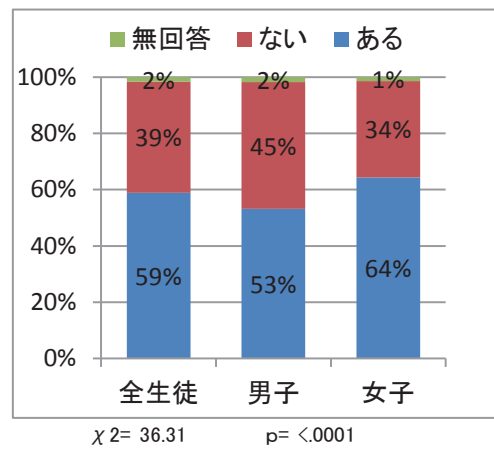


図1-2 中学2年生



小学5年生の男子では、夢の圧倒的多数が「サッカー選手」「野球選手」となっており、大きく離れて「料理人、シェフ、コック、寿司屋」となっています。中学2年生の男子では、依然として「野球選手」「サッカー選手」が1位、2位を占めますが、その割合は小さくなります。小学5年生の女子では、「パティシエ、ベーカリー」が圧倒的な1位、「歌手、アイドル、女優・声優、アナウンサー、芸人、劇団」が2位となっています。中学2年生の女子では、「パティシエ等」は6位に下がり、「保育士・幼稚園教諭」がトップとなります。

表1-1 小学5年生 男子 夢トップ15

1位	サッカー選手	221
2位	野球選手	215
3位	料理人、シェフ、コック、寿司屋	57
4位	医師、歯科医師、獣医師	43
5位	研究者、学者	38
6位	警察官、消防士、自衛隊	35
7位	ゲームクリエイター	34
8位	漫画家、画家	32
9位	芸人、アナウンサー、芸能人、声優、歌手	30
10位	大工	27
10位	バスケット選手	27
12位	電車運転士、パイロット	23
13位	水泳選手	21
14位	教師	18
15位	建築士	17

表1-2 中学2年生 男子 夢トップ15

1位	野球選手	86
2位	サッカー選手	65
3位	警察官、消防士、自衛隊	32
4位	医師、歯科医師、獣医師	29
5位	歌手、俳優、芸人、声優、プロデューサー、AD	28
6位	教師	25
7位	公務員、会社員、サラリーマン	23
8位	料理人、シェフ、コック、寿司屋	21
9位	漫画家、画家、イラストレーター	17
9位	電車運転士、パイロット	17
11位	エンジニア、プログラマー	16
12位	研究者、学者	15
12位	大工	15
14位	ゲームクリエイター	14
14位	建築士	14

表1-3 小学5年生 女子 夢トップ15

1位	パティシエ、ベーカリー	176
2位	歌手、アイドル、女・声優、アナウンサー、芸人、劇団	108
3位	幼稚園教諭、保育士	88
4位	漫画家、画家、書道家	86
5位	医師、歯科医師、獣医師	74
6位	ファッションデザイナー、工業デザイナー	59
7位	教師	56
8位	看護師	55
8位	美容師、ネイリスト	55
10位	ダンサー、バレリーナ	38
11位	ペットショップ、ペットトリマー	34
12位	ピアニスト、音楽家	32
13位	薬剤師	30
14位	モデル	19
15位	料理人、レストラン、コック	16

表1-4 中学2年生 女子 夢トップ15

1位	保育士、幼稚園教諭	##
2位	歌手、アイドル、声・女優、アナウンサー、芸人、劇団	97
3位	看護師、助産師	65
4位	美容師、ネイリスト、メイクアップアーティスト	56
5位	ファッションデザイナー、工業・インテリアデザイナー	44
6位	漫画家、イラストレーター	39
6位	パティシエ、ケーキ屋	39
8位	教師	35
9位	音楽家、音楽奏者、バンド	33
10位	医師、歯科医師、獣医師	32
11位	ダンサー、バレリーナ	23
12位	薬剤師	20
13位	ペットトリマー、ペットショップ	18
14位	公務員、会社員、OL	16
15位	通訳	14

子どもが夢を持たない理由は何でしょうか。「将来の夢」がない子ども(小学5年生612人、中学2年生1,137人)に、夢がない理由を聞いたところ、「具体的に何も思い浮かばないから」という回答が最も多く小学生の5割、中学生の7割となります。中学生が小学生に比べ夢を持たない理由は、社会についての理解が深まる一方で自分の具体的な夢が見いだせないところにあるかも知れません。

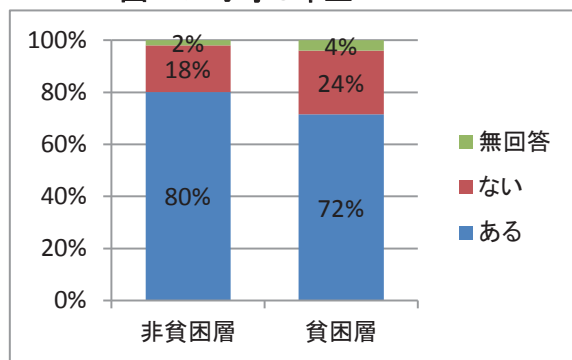
表1-5 「将来の夢」がない理由

	小学生		中学生	
	男子	女子	男子	女子
もうすべてに満足しているから	26 4%	5 4%	18 2%	1 1%
ゆめが、かなうのが難しいと思うから	88 14%	15 14%	146 13%	12 14%
具体的に、何も思い浮かばないから	368 60%	59 62%	797 70%	68 68%
わからない	125 20%	18 22%	167 15%	14 15%
無回答	5 0.8%	0.3 1.2%	9 0.8%	0.8 0.8%

$\chi^2 = 21.40$        $p = 0.0062$        $\chi^2 = 21.40$        $p = 0.0062$

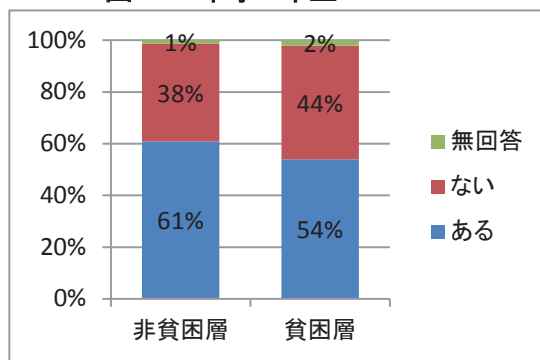
将来の夢が「ない」とした子どもの割合は、家庭の経済状況と関係しています。家庭の所得が貧困層の子どもは、そうでない子どもに比べ、将来の夢がないと答える割合が多くなっています。「夢がない」と答えた子どもの割合は、小学5年生では6%、中学2年生でも6%の差があります。

図1-3 小学5年生



$\chi^2 = 14.71$        $p = 0.0006$

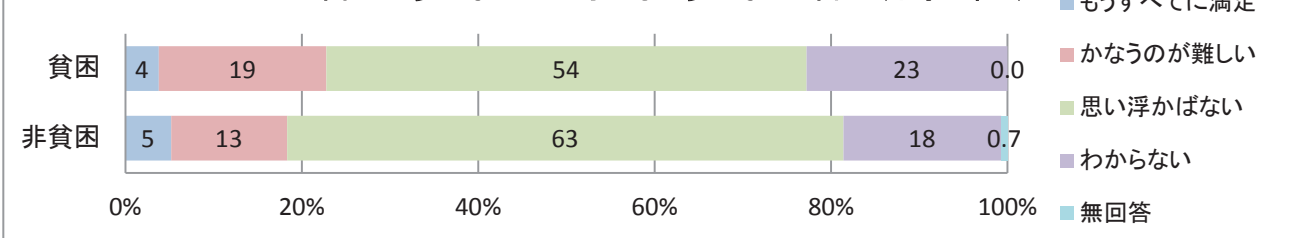
図1-4 中学2年生



$\chi^2 = 6.08$        $p = 0.0479$

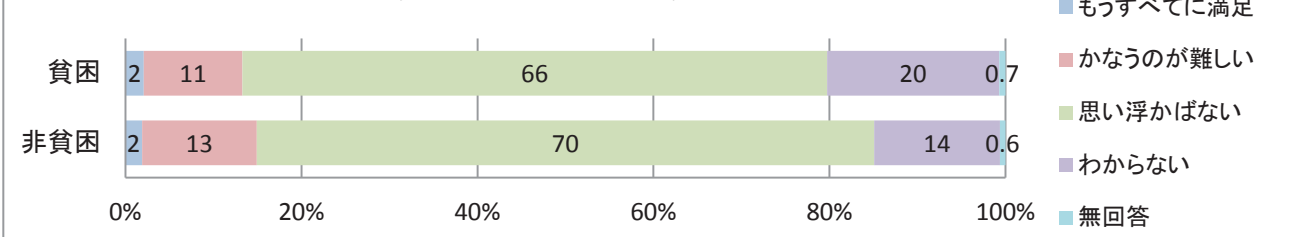
また、貧困層の子どもと非貧困層の子どもでは、「夢がない」とした理由も若干異なっている可能性があります。小学5年生では、貧困層の子どもの方が、非貧困層に比べて、「かなうのがむずかしい」「わからない」とした割合が多く、「思い浮かばない」とした割合が少なく、中学2年生では、貧困層の子どもの方が「わからない」とした割合が多くなり、「思い浮かばない」「かなうのが難しい」とした割合が少なくなっています。しかし、これらの差は比較的小さく、統計的に有意な差ではありません。

図1-5 夢がないとした子ども : 夢がない理由 (小学5年生)



$\chi^2 = 4.07$        $p = 0.3963$

図1-6 夢がないとした子ども : 夢がない理由 (中学2年生)



$\chi^2 = 2.83$        $p = 0.5868$

## 2. 物品の所有状況

次に、以下の12の物品について、所有状況を聞きました。小学5年生では、9割以上の子どもが自転車やゲーム機を持っています。一番所有率が低かったのは携帯音楽プレーヤー等でした。小学5年生が一番多い割合で「欲しいと思っているが持っていない」としたのは「携帯電話」(41%)、次が「携帯音楽プレーヤー」(38%)、「インターネットパソコン」(28%)でした。

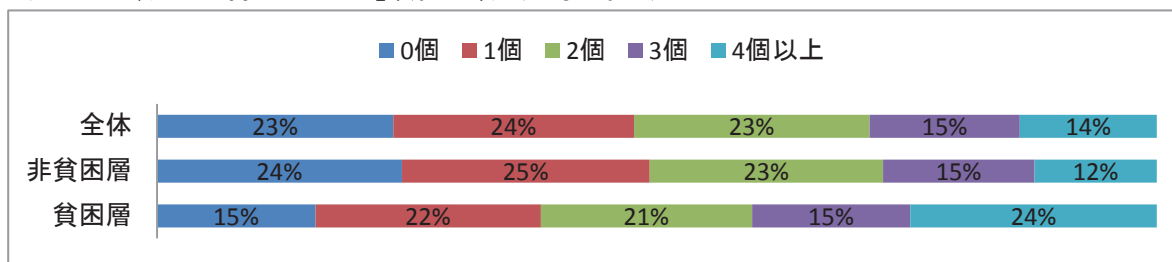
表2-1 物品の所有状況(小学5年生)

(n=3,152)

	持っている		持っていない					
	人数	(%)	欲しい	(%)	欲しくない	(%)	無回答	(%)
1. 自分だけの本	2,304	73%	266	8%	511	16%	71	2%
2. 子ども部屋	2,458	78%	490	16%	152	5%	52	2%
3. インターネットパソコン	1,731	55%	881	28%	477	15%	63	2%
4. 専用の勉強机	2,653	84%	253	8%	194	6%	52	2%
5. スポーツ用品	2,359	75%	154	5%	578	18%	61	2%
6. ゲーム機	2,842	90%	148	5%	108	3%	54	2%
7. たいていの友達も持っているおもちゃ	2,040	65%	392	12%	639	20%	81	3%
8. 自転車	2,978	94%	75	2%	39	1%	60	2%
9. おこづかい	2,480	79%	410	13%	210	7%	52	2%
10. 友だちと同じような服	1,648	52%	232	7%	1,205	38%	67	2%
11. 携帯電話	1,399	44%	1,308	41%	391	12%	54	2%
12. 携帯音楽プレーヤー等	1,053	33%	1,184	38%	851	27%	64	2%

「欲しいが持っていない」とした項目の数を家庭の経済状況別に見ると、小学5年生の23%は「0個」(ひとつも「欲しいが持っていない」とした項目はない)としていますが、24%は「1個」、23%は「2個」、15%は「3個」、14%は「4個以上」となっています。これを家庭の経済状況別に集計すると、貧困層では「4個以上」が多くなっており、「0個」が少なくなっています。

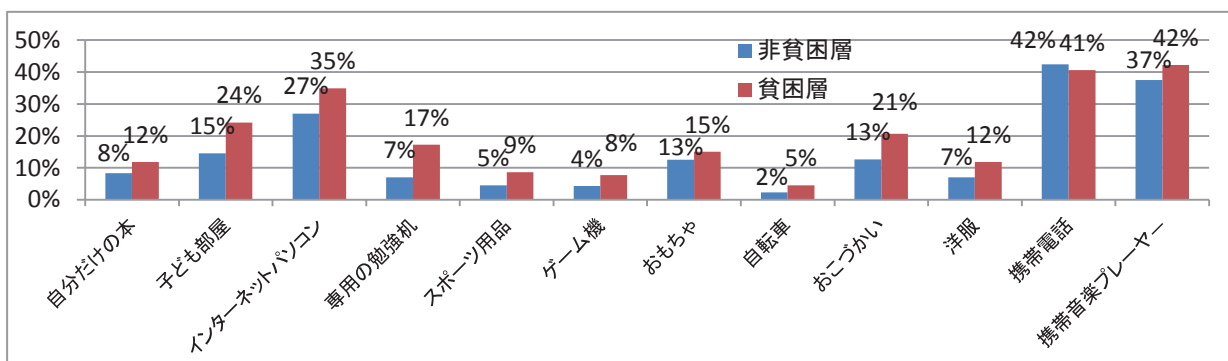
図2-1 「欲しいが持っていない」項目の数 (小学5年生)



( $\chi^2=58.569$   $p<.0001$ )

項目別に非貧困層と貧困層の状況を比べると、「携帯電話」以外の項目ではすべて貧困層の方が「欲しいのに持っていない」と回答した割合が多くなっています。特に、差が大きかったのは、「子ども部屋」「勉強机」「おこづかい」「インターネット・パソコン」でした。携帯電話は、わずかに貧困層の方が非貧困層に比べ持っていない子どもの割合が低くなっていますが、この差は統計的に有意ではありません。

図2-2 「欲しいが持っていない」子どもの割合(項目別): (小学5年生)



( $\chi^2=17.87$  39.17 13.06 63.35 29.99 14.43 13.85 15.80 18.47 15.35 5.37 8.33)

$p=0.0005 <.0001$  0.0045 <.0001 <.0001 0.0024 0.0031 0.0012 0.0004 0.0015 0.1467 0.0397)

中学2年生でも、約9割の子どもは、自転車、ゲーム機、専用の勉強机を持っています。中学2年生が一番多い割合で「欲しいと思っているが持っていない」としたのは「インターネットパソコン」(21%)、「携帯電話」(21%)、「携帯音楽プレーヤー」(20%)でした。

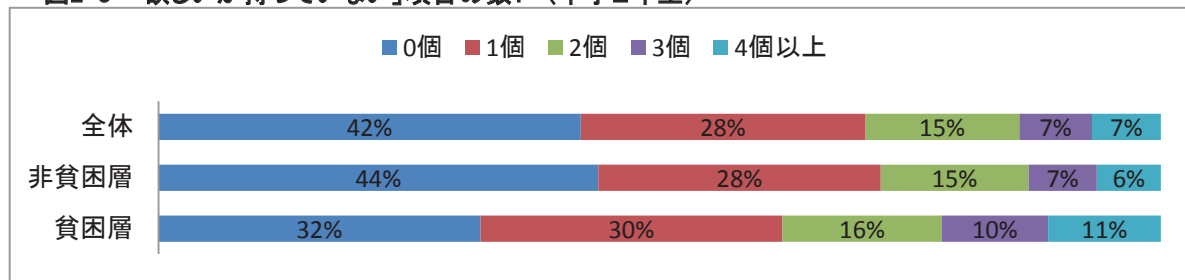
表2-2 物品の所有状況(中学2年生)

(n=2,880)

	持っている		持っていない					
	数	(%)	欲しい	欲しい	欲しくない	無回答		
			数	(%)	数	(%)		
1. 自分だけの本	2,208	77%	150	5%	482	17%	40	1%
2. 子ども部屋	2,353	82%	388	13%	110	4%	29	1%
3. インターネットパソコン	1,946	68%	612	21%	282	10%	40	1%
4. 専用の勉強机	2,513	87%	129	4%	201	7%	37	1%
5. スポーツ用品	2,175	76%	75	3%	592	21%	38	1%
6. ゲーム機	2,577	89%	83	3%	179	6%	41	1%
7. たいていの友だちがもっているおもちゃ	1,850	64%	184	6%	771	27%	75	3%
8. 自転車	2,747	95%	65	2%	29	1%	39	1%
9. おこづかい	2,442	85%	288	10%	117	4%	33	1%
10. 友だちと同じような服	1,770	61%	227	8%	838	29%	45	2%
11. 携帯電話	2,046	71%	591	21%	213	7%	30	1%
12. 携帯音楽プレーヤー等	1,947	68%	590	20%	309	11%	34	1%

「欲しいが持っていない」とした項目の数を見ると、小学5年生に比べて、中学2年生の方が項目数が少なくなっています。「0個」(ひとつも「欲しいが持っていない」とした項目はない)児童生徒の割合は、小学生では23%ですが、中学生では42%となります。一方で、依然として、家庭の経済状況による差はあり、「4個以上」とする割合は、非貧困層では6%ですが、貧困層では11%となっています。

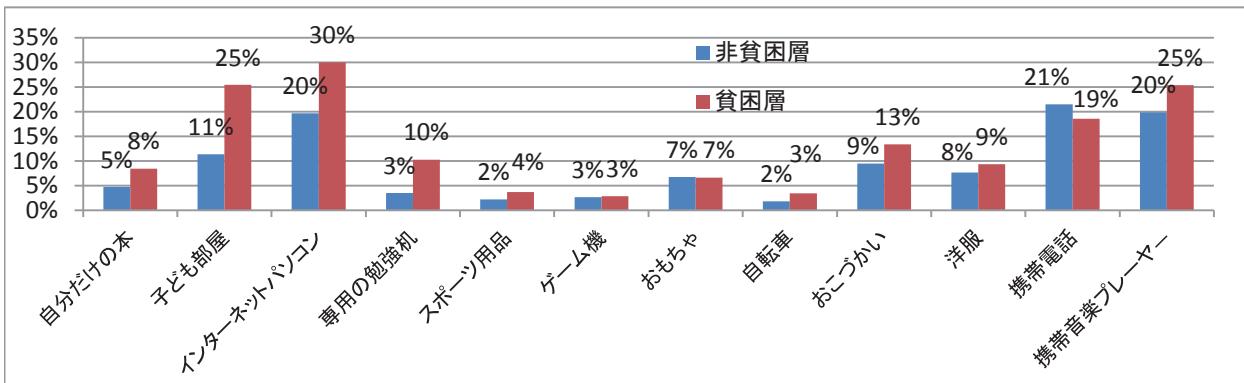
図2-3 「欲しいが持っていない」項目の数：(中学2年生)



( $\chi^2=35.32$   $p=0.0002$ )

項目別に非貧困層と貧困層の状況を比べると、いくつかの項目は統計的に有意な差がなくなっています(スポーツ用品、ゲーム機、たいていの友だちがもっているおもちゃ、自転車、携帯電話)。一方で、自分だけの本、子ども部屋、インターネット・パソコン、勉強机、友だちと同じような服、携帯音楽プレーヤー等には家庭の経済状況による格差があります。

図2-4 「欲しいが持っていない」子どもの割合(項目別)：(中学2年生)

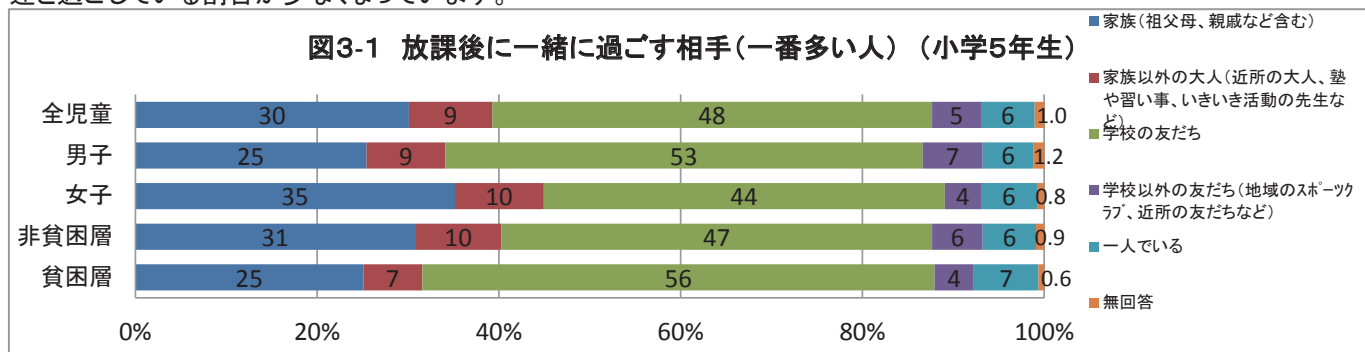


( $\chi^2=7.73$  47.82 30.30 2.63 0.024 0.0088 3.81 4.75 1.06 1.43 5.23  $p=0.0054$  <.0001 <.0001 <.0001 0.105 0.877 0.925 0.051 0.0292 0.302 0.23 0.022)



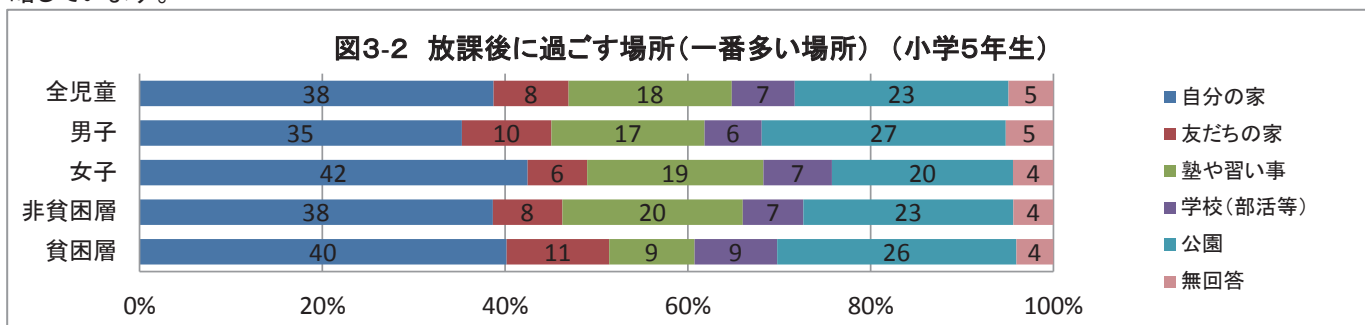
### 3. 放課後の過ごし方

子どもに、平日の放課後に過ごす相手(一番多い回数の人)を聞きました。小学生では、全児童の約3割は家族と、約5割は学校の友だちと過ごしています。「一人でのいる」とした子どもも6%存在します。男女別に比べると、男子の方が、女子よりも学校の友達や学校以外の友達と過ごしている割合が多く、家族と過ごしていることが少なくなっています。家庭の経済状況別には、低所得層の方が、中高所得層に比べて学校の友だちと過ごしており、家族、家族以外の大人、学校以外の友達と過ごしている割合が少なくなっています。



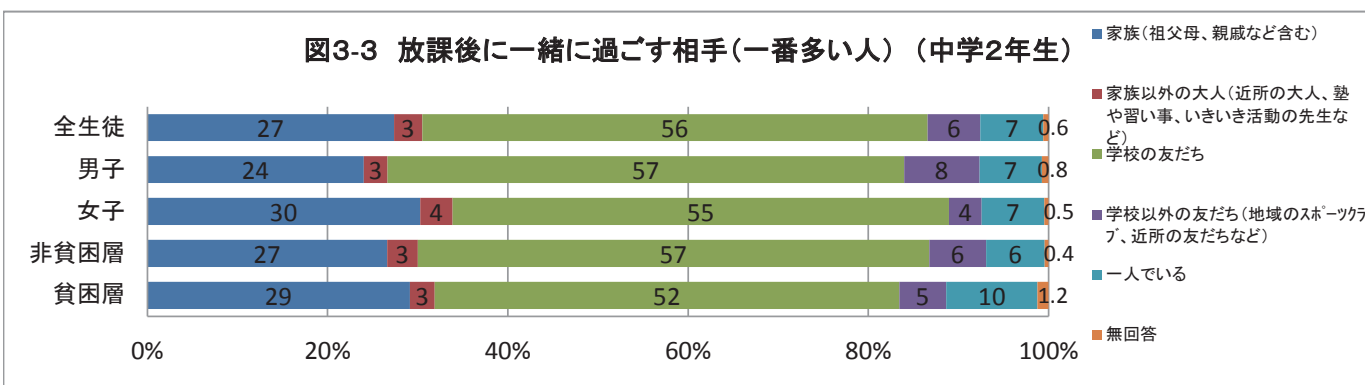
(男女差  $\chi^2=47.868$   $p<.0001$ , 所得階層差  $\chi^2=12.3717$   $p=0.0300$ )

小学5年生が平日の放課後に過ごす場所(一番多い場所)を見ると、「自分の家」(38%)が最も多く、次に公園(23%)となっています。男女別では、女子は「自分の家」や「塾や習い事」が多く、「公園」「友だちの家」が少なくなっています。家庭の経済状況別では、低所得層は「塾や習い事」が大幅に少なく、「公園」や「友だちの家」が多いことが特徴的です。なお、回答には「商店街やショッピングモール」(0.3%)、「ゲームセンター」(0.3%)が若干ありましたが、少数のためグラフでは省略しています。

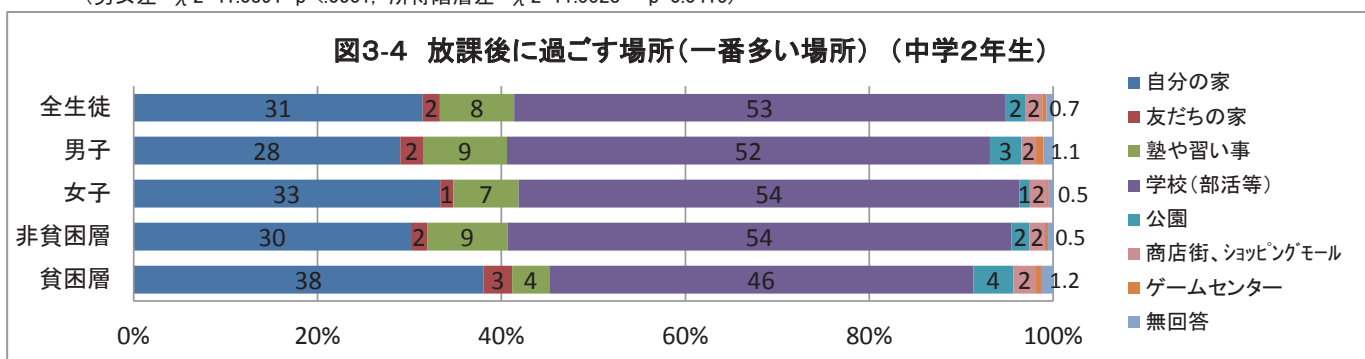


(男女差  $\chi^2=42.984$   $p<.0001$ , 所得階層差  $\chi^2=24.934$   $p=0.0008$ )

中学2年生でも、男子に比べ女子の方が「家族」と放課後を過ごす割合が多く、友だちと過ごす割合が低くなっており、この傾向は小学5年生と変わりません。しかし、「一人でのいる」と答えた割合については、小学5年生では顕著でなかった貧困-非貧困層の差が、中学2年生では顕著に見られます。また、場所では、貧困層の子どもが自宅過ごす割合が多く、学校で過ごす割合、塾や習い事で過ごす割合が少ないことが特徴的です。



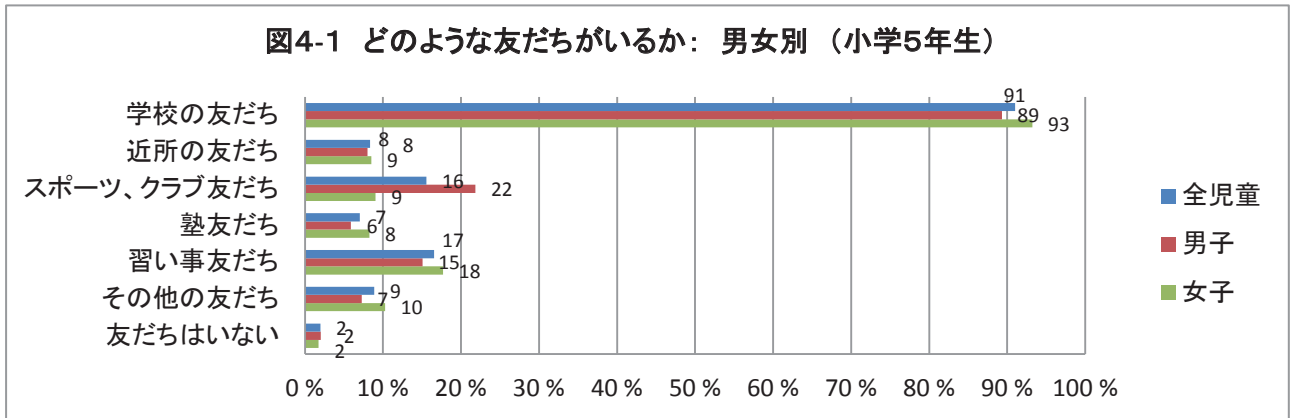
(男女差  $\chi^2=41.0391$   $p<.0001$ , 所得階層差  $\chi^2=11.5523$   $p=0.0415$ )



(男女差  $\chi^2=46.7022$   $p<.0001$ , 所得階層差  $\chi^2=32.6684$   $p=0.0006$ )

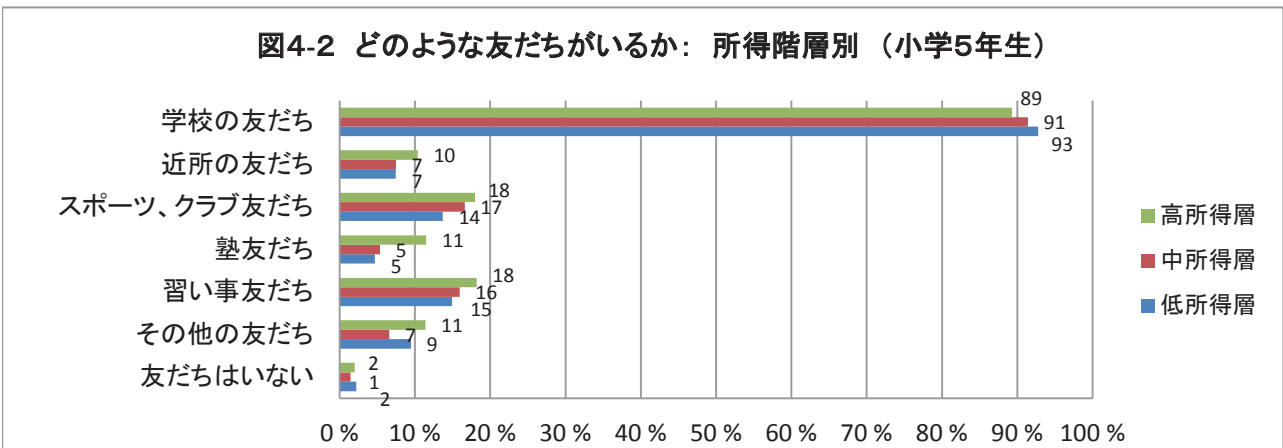
## 4. 友だち

次に、友だちの種別と有無を聞いたところ、小学5年生の91%は「学校の友だち」があると答えています。男子の22%は「スポーツ、クラブの友だち」また男子・女子の15%以上は「習い事の友だち」があります。



(男女差  $\chi^2=14.75$  0.28 95.93 6.51 3.85 8.64 0.31  $p=0.0001$  0.60 <.0001 0.01 0.05 0.00 0.58)

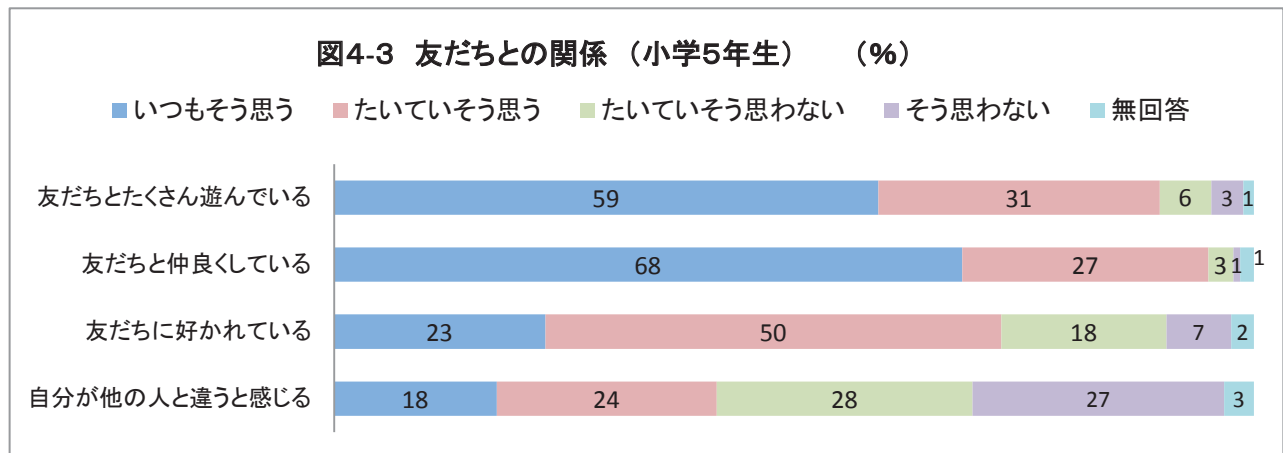
友だちとの関係は、家庭の経済状況によっても異なります。高所得層の子どもほど「学校の友だち」が若干少なく、「近所の友だち」「スポーツ、クラブの友だち」「塾の友だち」が多い傾向があります。



(所得階層差  $\chi^2=6.83$  6.57 6.33 38.02 3.67 12.64 1.56  $p=0.03$  0.03 0.04 <.0001 0.16 0.00 0.46)

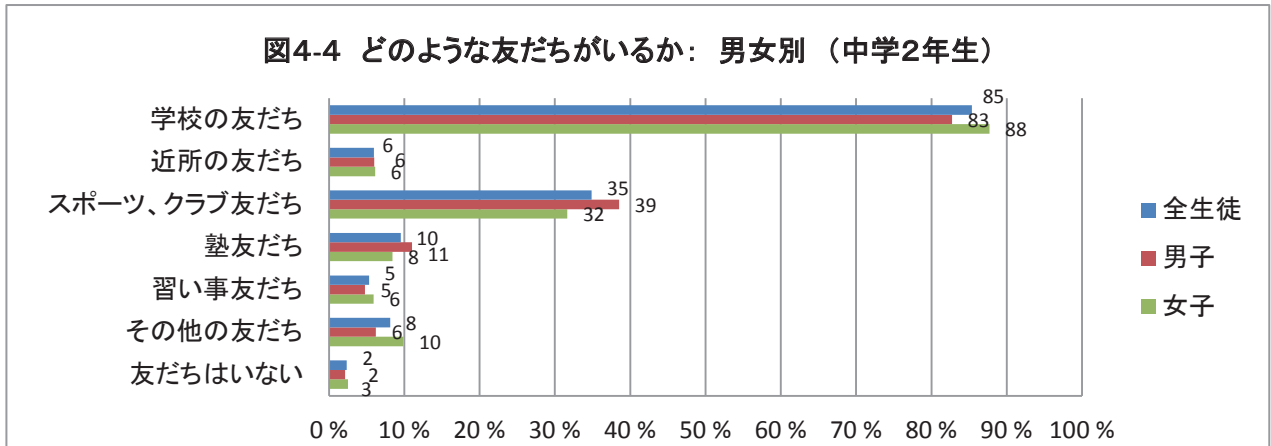
友だちとの関係に関し、「友だちとたくさん遊んでいる」については約9割の小学5年生が「いつもそう思う」「たいていそう思う」と答えています。「友だちと仲良くしている」については、約9割5分の子どもが肯定的に答えています。一方で、自分が「友だちに好かれている」かどうかについては、約7割は肯定的な答えをしていますが、18%は「たいていそう思わない」7%が「そう思わない」と否定的です。また、「自分が他の人と違うと感じる」については、約4割が「いつもそう思う」「たいていそう思う」、約5割5分が「たいていそう思わない」「そう思わない」としています。

小学5年生では、所得階層による友だちとの関係についての回答の違いは見られませんでした。



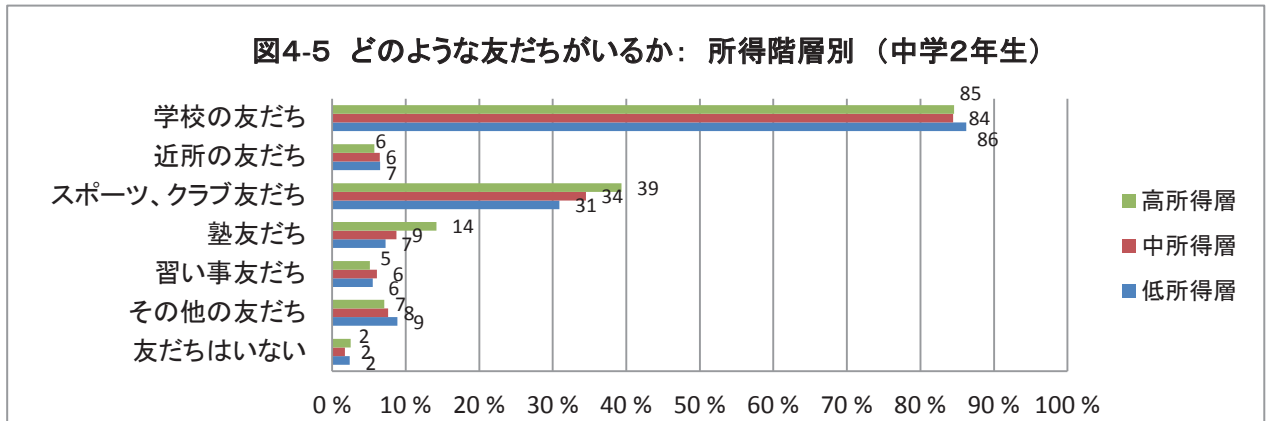


中学2年生では、「学校の友だち」がいるとした子どもの割合が小学生に比べ若干減り、85%となっています。一方で、「スポーツ、クラブ友だち」は小学5年生に比べて増え、男子では39%、女子では32%となっています。



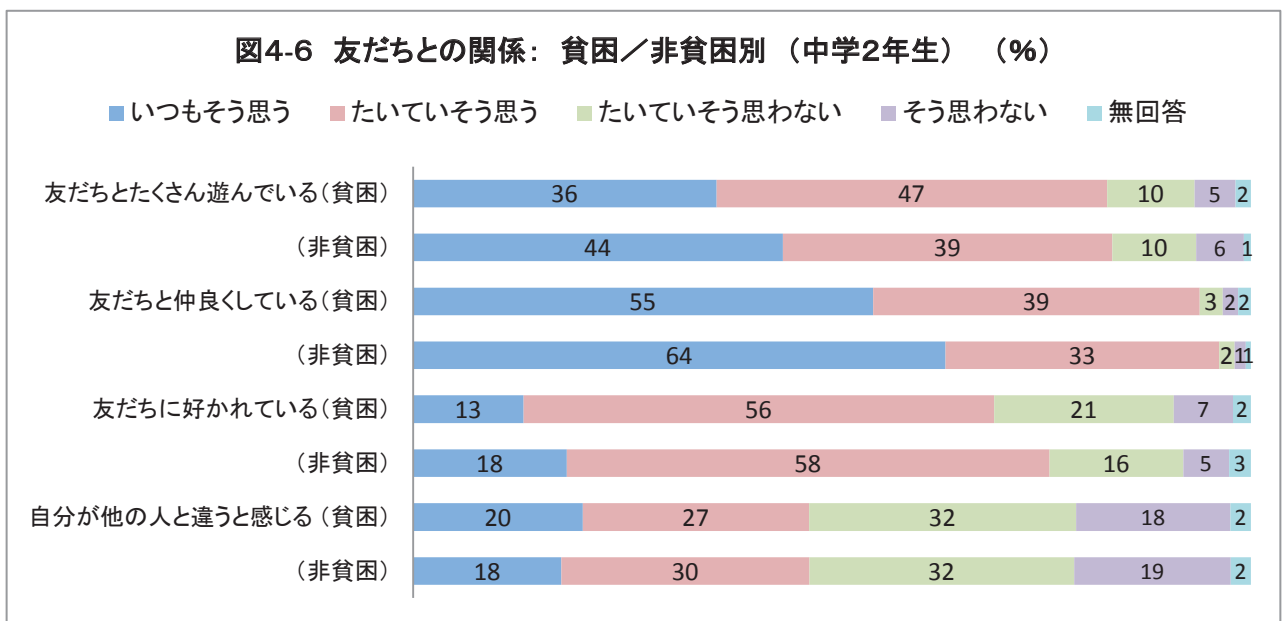
(男女差  $\chi^2=13.84$  0.0165 14.71 5.47 1.78 12.42 0.43  $p=0.0002$  0.90 0.0001 0.02 0.18 0.0004 0.51)

中学2年生では、友だちの有無の経済階層による違いは少なくなります。所得階層別に、統計的に有意な差があったのは「スポーツ、クラブの友だち」と「塾の友だち」だけでした。この二つについては、高所得層の高いほど、高い割合で「友だちがある」としています。



(所得階層差  $\chi^2=1.27$  0.53 12.65 23.71 0.77 1.88 1.21  $p=0.53$  0.77 0.0018 <.0001 0.68 0.39 0.55)

しかし、友だちとの関係については、貧困／非貧困層で統計的に有意な差が見られました。全体的に、小学5年生に比べ、中学2年生は「友だちとたくさん遊んでいる」「友だちと仲良くしている」「友だちに好かれている」とした子どもの割合が少ないですが、貧困層の中学2年生は特にそれが少なくなっています。「自分が他の人と違うと感じる」については、統計的に有意な差はありませんでした。



(所得階層差  $\chi^2=10.83$  11.55 10.88 1.68  $p=0.029$  0.021 0.028 0.794)

## 5. 会話

「あなたは、困っていることや悩んでいること、楽しいことや悲しいことを、他の人にどれくらい話しますか」という問いに対しては、小学5年生の52%が「家族(親)」に、42%が「友だち」に「よく話す」としています。「家族(親)」と「ぜんぜん話さない」としたのは7%でした。学校の先生に「よく話す」とした子どもは11%、「時々話す」としたのも25%でしたが、「ぜんぜん話さない」とした子どもも32%います。

中学2年生になると、親、きょうだい、祖父母などの家族と「よく話す」割合が小学5年生に比べ減り、「友だち」が若干増えます。学校の先生や、その他の大人と「よく話す」「時々話す」割合も減り、約半数は家族以外の大人と「ぜんぜん話さない」状況になります。

図5-1 誰と会話をするか（小学5年生）（％）

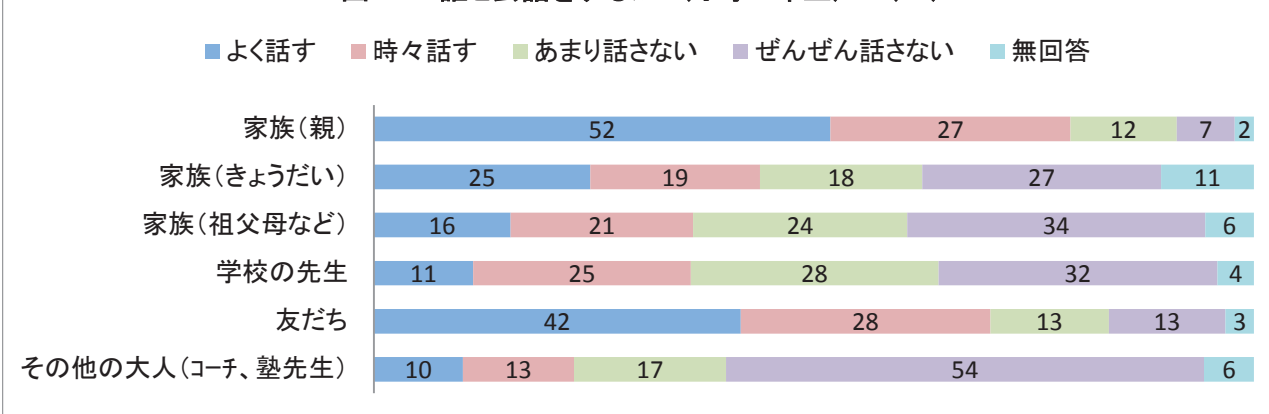
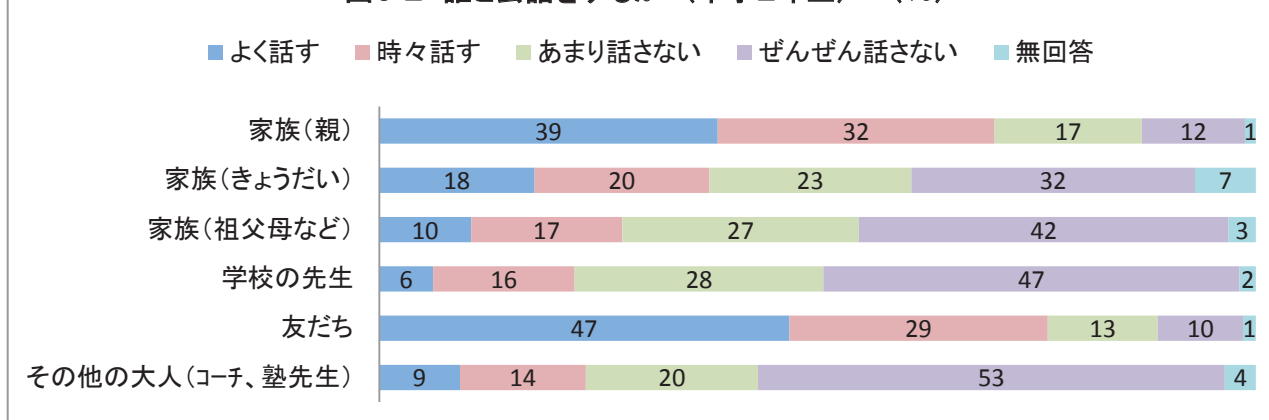


図5-2 誰と会話をするか（中学2年生）（％）



家族(親、きょうだい、祖父母など)、学校の先生、友だち、その他の大人(コーチ、塾の先生など)の誰とも「ぜんぜん話さない」または「あまり話さない」と答えた会話が少ない子どもも存在します。誰とも「ぜんぜん話さない」としたのは、小学5年生では3%、中学2年生では4%でした。誰とも「あまり話さない」「ぜんぜん話さない」としたのは、小学5年生では8%、中学2年生では10%となっています。会話が少ないのは男子の方が女子より多くまた、小学5年生では貧困層の方が非貧困層に比べ多いことがわかりました。

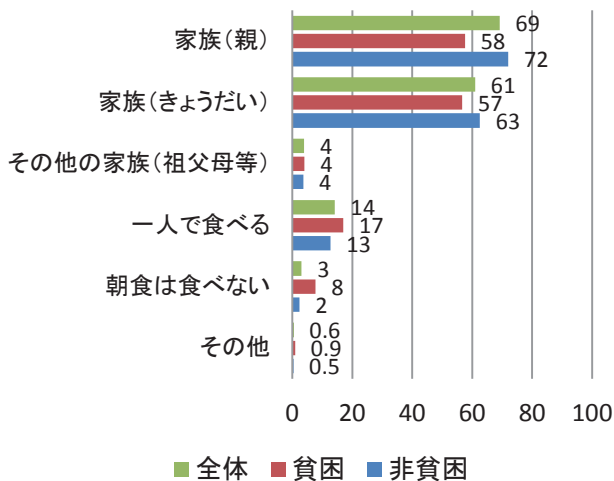
表5-1 会話が少ない子どもの割合（％）

学年	誰とも「あまり話さない」「ぜんぜん話さない」	誰とも「ぜんぜん話さない」	全数	男子	女子	非貧困	貧困
小学5年生	誰とも「あまり話さない」「ぜんぜん話さない」	誰とも「ぜんぜん話さない」	8	11	5	7	11
			3	4	2	3	3
(χ <sup>2</sup> =33.89 13.40 p<.0001 0.0012) (χ <sup>2</sup> =5.76 0.16 p=0.016 0.68)							
中学2年生	誰とも「あまり話さない」「ぜんぜん話さない」	誰とも「ぜんぜん話さない」	10	16	5	10	11
			4	7	2	4	4
(χ <sup>2</sup> =88.50 36.56 p<.0001 <.0001) (χ <sup>2</sup> =0.17 0.01 p=0.68 0.93)							

## 6. 食事

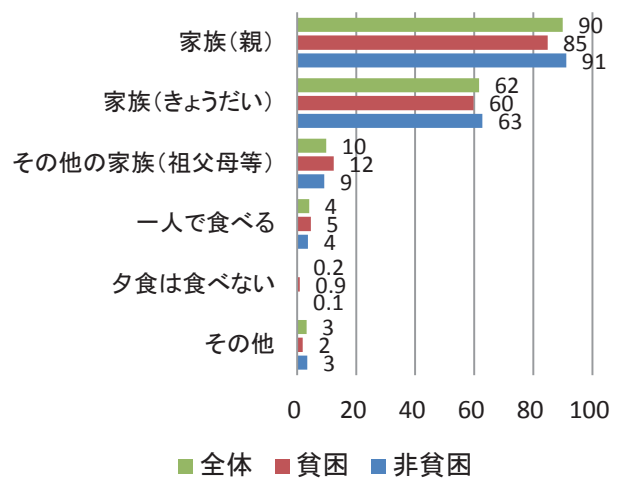
平日と休日の朝食・夕食を誰と食べるかを聞きました。どの食事でも親と食べるとした子どもの割合が一番多くなっています。しかし、朝食では「一人で食べる」「食べない」とした子どもが少なからず存在し、その割合は家庭の経済状況によって異なります。小学5年生の平日の朝食では、貧困層の子どもの17%、非貧困層の子どもの13%、休日の朝食では23%と15%が「一人で食べる」としています。また、平日の朝食は、貧困層の8%、非貧困層の2%、休日の朝食はそれぞれ10%と4%が「食べない」としています。夕食は「一人で食べる」「食べない」は少なくなりますが、親と食べるとした子どもの割合は、貧困層の子どもの方が低くなります。

図6-1 誰と食べるか:平日朝食(複数回答)  
小学5年生(%)



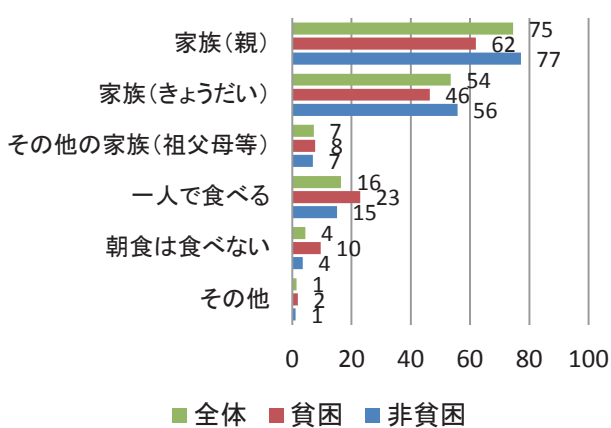
( $\chi^2=28.28$  41.7 0.10 4.41 26.61 1.18  $p<.0001$  0.04 0.75 0.04  $<.0001$  0.28)

図6-2 誰と食べるか:平日夕食(複数回答)  
小学5年生(%)



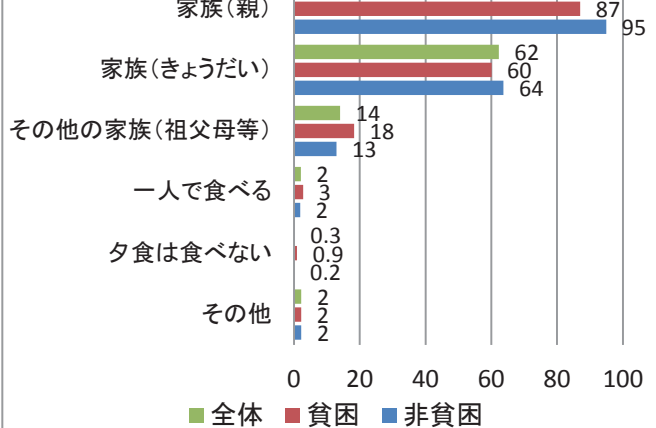
( $\chi^2=13.20$  1.12 3.31 0.66 8.22 2.22  $p=0.0003$  0.29 0.07 0.41 0.004 0.14)

図6-3 誰と食べるか:休日朝食(複数回答)  
小学5年生(%)



( $\chi^2=35.72$  10.11 0.29 12.97 25.43 1.40  $p<.0001$  0.0015 0.59 0.0003  $<.0001$  0.24)

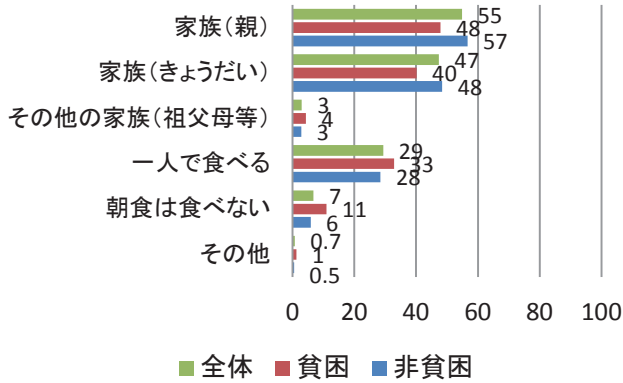
図6-4 誰と食べるか:休日夕食(複数回答)  
小学5年生(%)



( $\chi^2=31.64$  1.60 6.92 1.27 6.33 0.007  $p<.0001$  0.21 0.009 0.26 0.012 0.94)

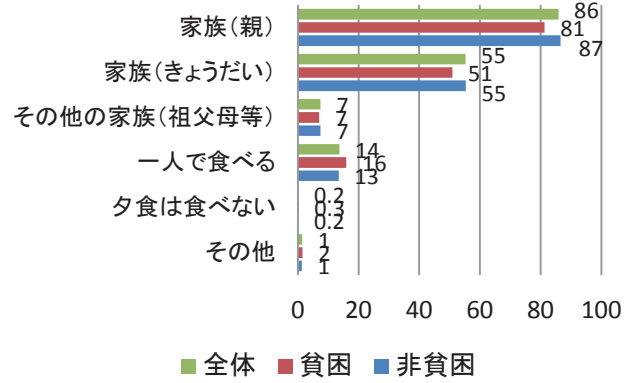
中学2年生になると、小学5年生に比べて、家族(親)、家族(きょうだい)と食べる割合が、特に朝食については少なくなります。逆に、「一人で食べる」割合は多くなっており、休日の朝食となると貧困層の44%、非貧困層の35%は「一人で食べる」としています。孤食の傾向が、年齢と共にあがることが確認されます。

図6-5 誰と食べるか:平日朝食(複数回答)  
中学2年生(%)



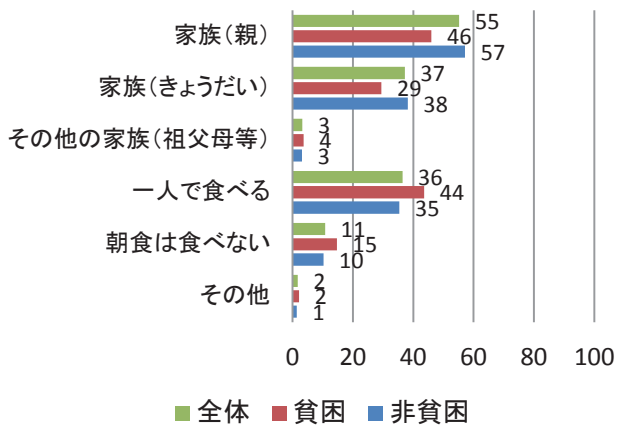
( $\chi^2=8.76$  7.7 2.03 2.58 12.29 2.71  $p=0.003$  0.006 0.154 0.108 0.0005 0.1)

図6-6 誰と食べるか:平日夕食(複数回答)  
中学2年生(%)



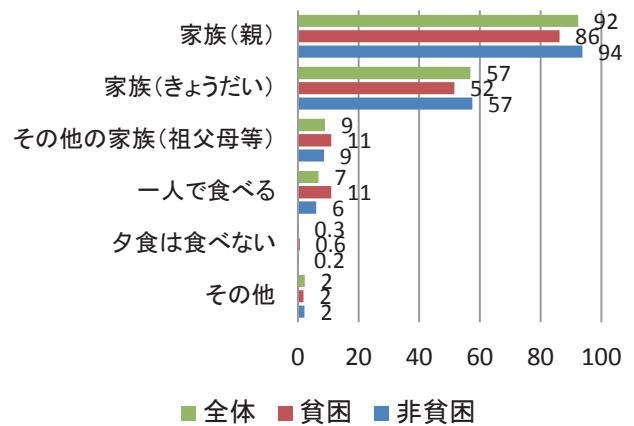
( $\chi^2=6.37$  2.25 0.07 1.52 0.18 0.12  $p=0.012$  0.134 0.8 0.22 0.67 0.73)

図6-7 誰と食べるか:休日朝食(複数回答)  
中学2年生(%)



( $\chi^2=14.15$  9.24 0.23 8.09 5.7 1.08  $p=0.0002$  0.002 0.63 0.005 0.017 0.3)

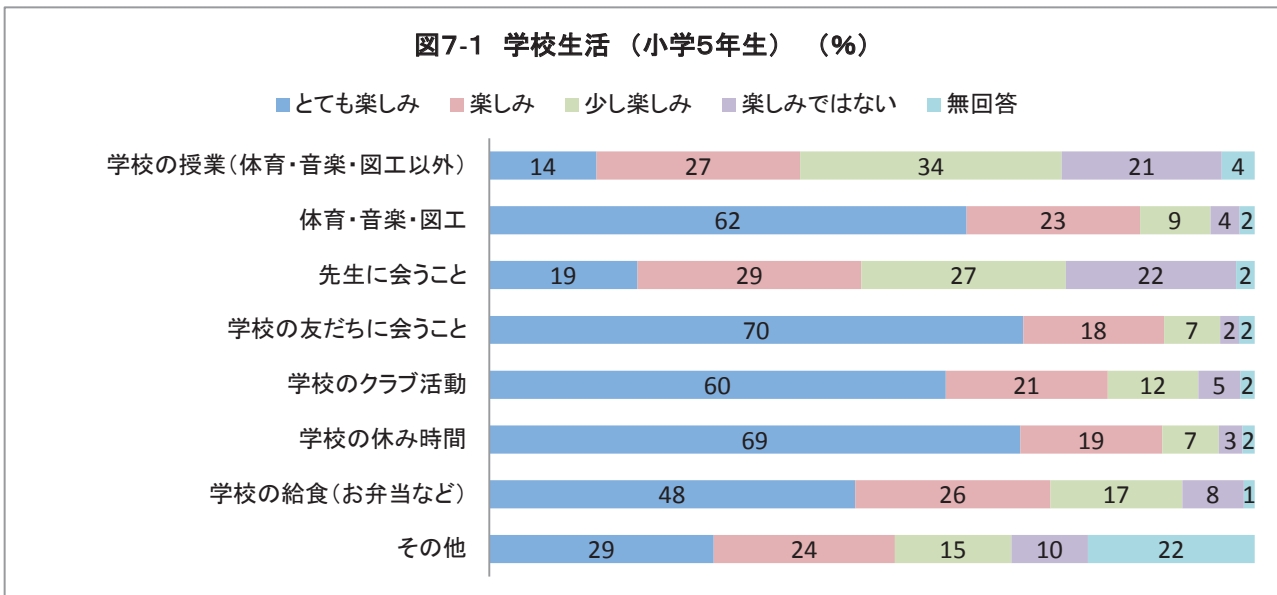
図6-8 誰と食べるか:休日夕食(複数回答)  
中学2年生(%)



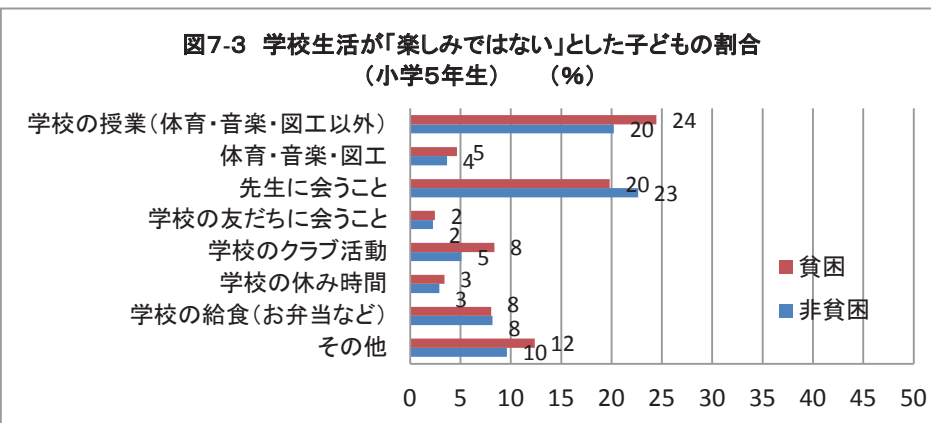
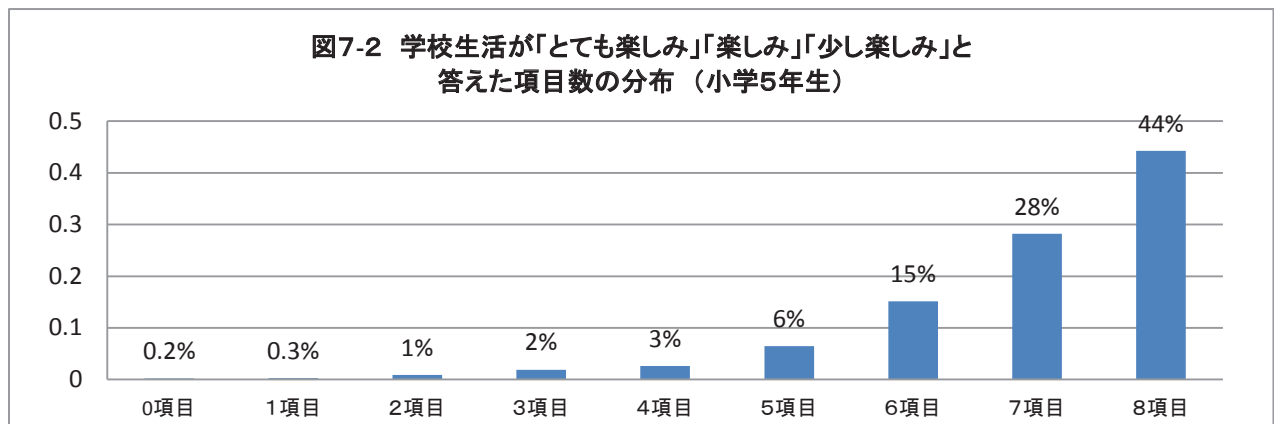
( $\chi^2=23.81$  4.06 2.05 11.42 2.01 0.14  $p<.0001$  0.04 0.15 0.0007 0.16 0.71)

## 7. 学校生活

次に、学校生活を楽しんでいるかを聞きました。学校生活の中で、小学5年生が「とても楽しみ」としている割合が最も高いのは「友達に会うこと」(70%)、「休み時間」(69%)、「クラブ活動」(60%)でした。「給食」(48%)は半数近い子どもが「とても楽しみ」にしています。一方、学校の授業については、「とても楽しみ」が14%、「楽しみ」が27%となっています。また、「楽しみではない」割合が一番高かったのは「先生に会うこと」(22%)、「学校の授業(体育・音楽・図工以外)」(21%)でした。



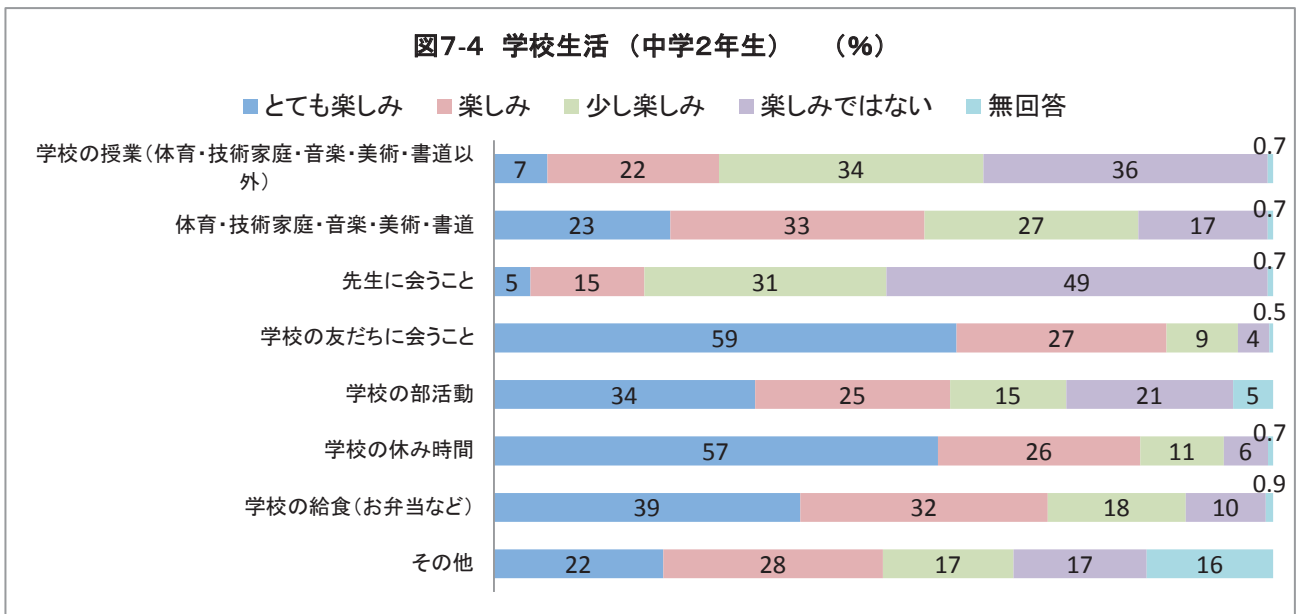
8つの項目について、「とても楽しみ」「楽しみ」「少し楽しみ」のどれかに○をつけている項目数を調べたところ、すべての項目(8項目)に○をつけていた子どもは全体の44%となり、子どもたちの半数は学校生活のさまざまな側面を多かれ少なかれ楽しんでいることがわかります。



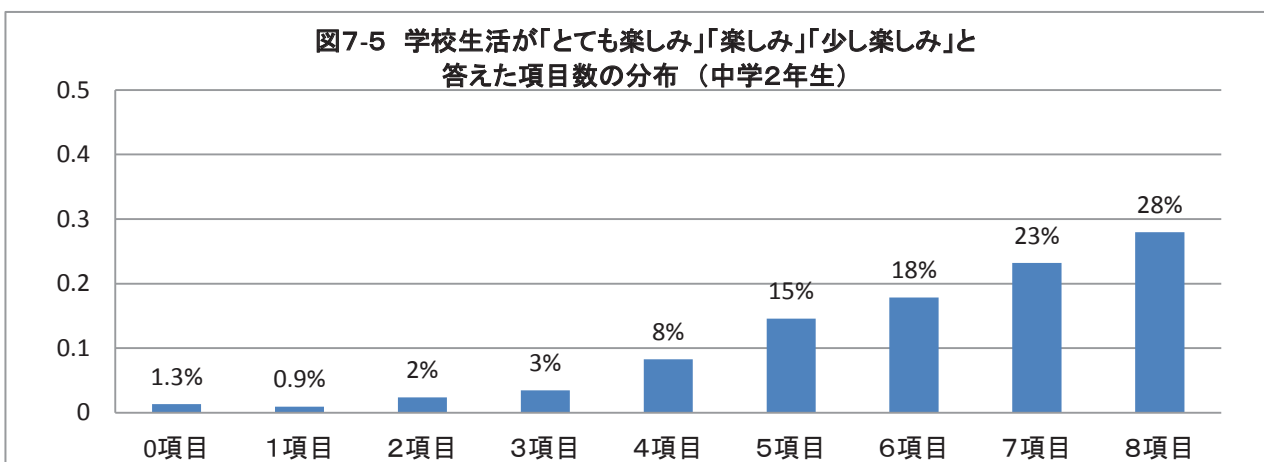
一方で、「楽しみではない」とした子どもも、項目によって数%から24%存在し、その率は家庭の経済状況によって異なります。貧困層の子どもは、授業やクラブ活動において非貧困層に比べ「楽しくない」と回答していますが、「先生に会うこと」については非貧困層に比べ低い割合となっています。

( $\chi^2=8.96$  8.82 6.4 8.89 18.44 4.79 9.95 2.12  $p=0.062$  0.066 0.171 0.064 0.001 0.31 0.041 0.0005)

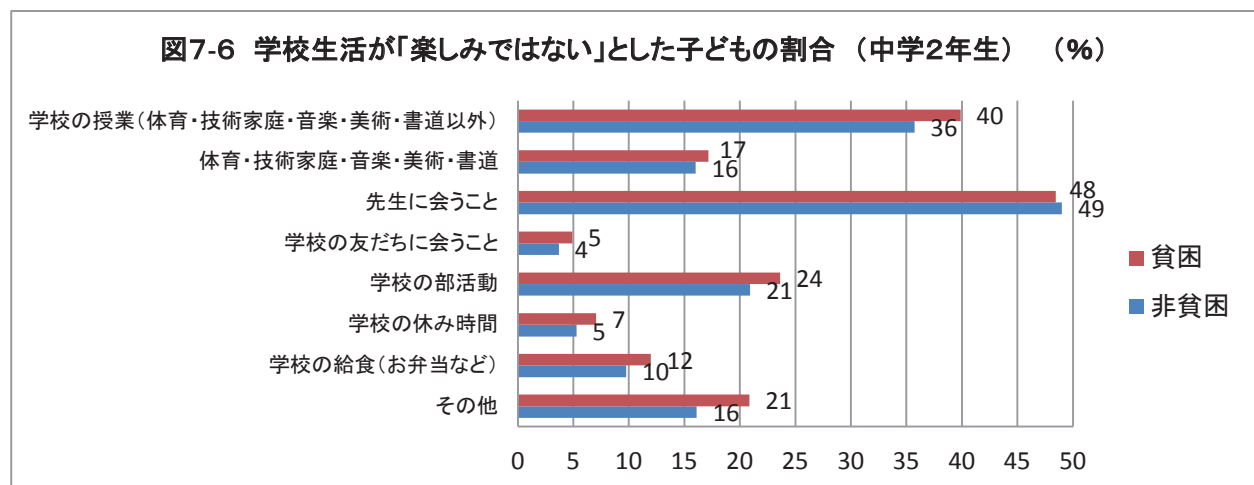
中学2年生では、すべての項目において「とても楽しみ」とする子どもの割合が減ります。学校の授業の2項目も大きく下がりますが、「部活動」や「給食(お弁当)」といった小学生の大多数が楽しみとした項目についても、「とても楽しみ」が減っています。



小学生と同様に、8つの項目について、「とても楽しみ」「楽しみ」「少し楽しみ」のどれかに○をつけている項目数を調べたところ、すべての項目(8項目)に○をつけていた子どもは全体の28%となり、小学5年生よりも大幅に少なくなっています。また、8項目中、4から5項目しか「楽しみ」としていない子どもも、それぞれ8%、15%と増えています。



中学2年生で、学校生活が「楽しみではない」とした子どもの割合は、家庭の経済状況によって若干の差がありますが、この差は統計的に有意ではありません。



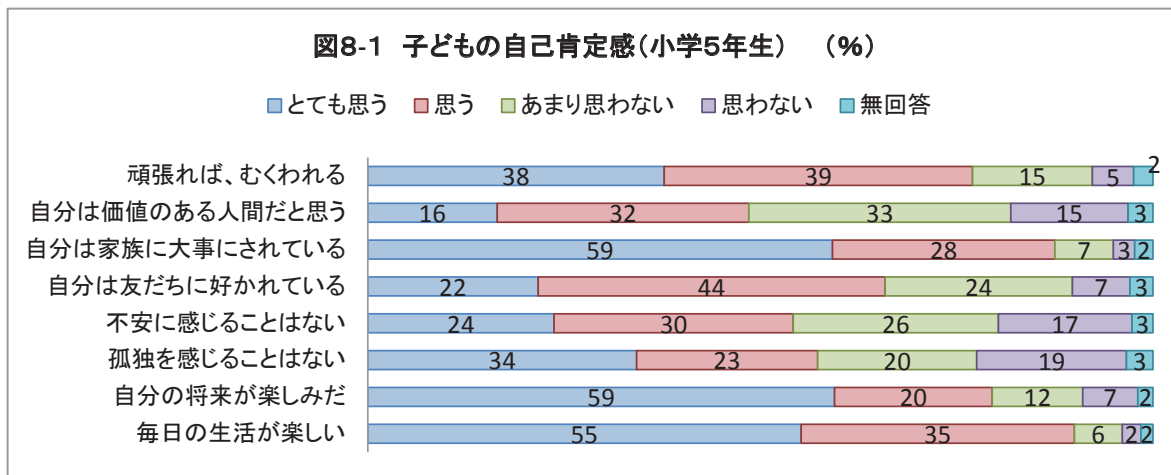
( $\chi^2=2.92$  3.69 3.95 5.07 3.41 4.66 9.86 5.17  $p=0.57$  0.45 0.41 0.28 0.49 0.32 0.04 0.27)



## 8. 子どもの自己肯定感

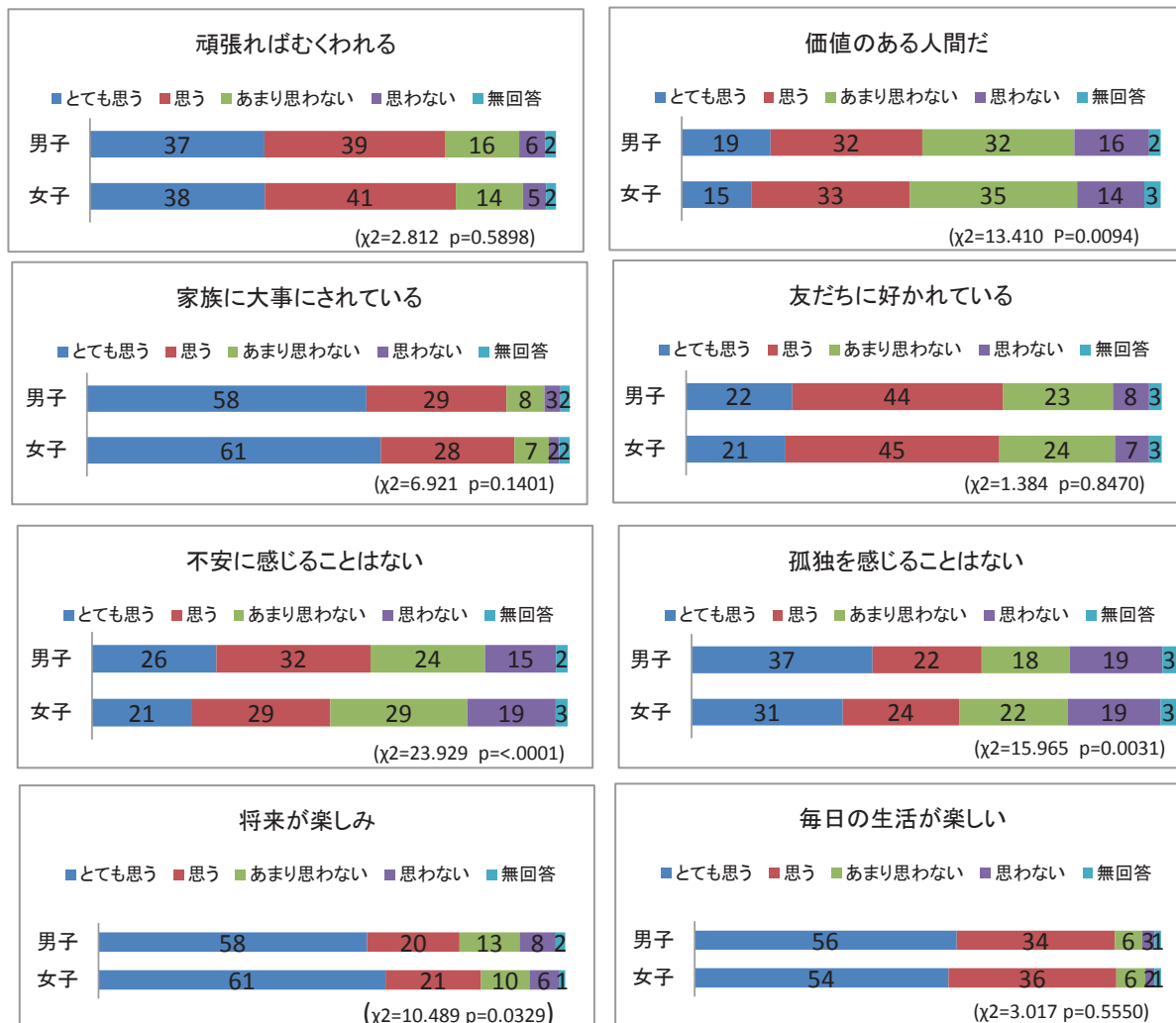
子どもに対する調査の最後に、自分のことをどう思っているか(自己肯定感)について聞きました。小学5年生では、「頑張ればむくわれる」について「とても思う」とした子どもは38%、「思う」が39%、「自分は家族に大事にされている」には59%(とても思う)、28%(思う)、「自分の将来が楽しみだ」には59%(とても思う)、20%(思う)など、大多数の子どもが肯定的な回答をしている項目もあります。

一方で、「自分は価値のある人間だと思う」については、「とても思う」16%、「思う」32%と答えた子どもがいる一方、それと同数の子どもが「あまり思わない」33%、「思わない」15%と答えています。また、「不安に感じることはない」「孤独を感じることはない」についても、4割程度の子どもが「あまり思わない」「思わない」と感じています。

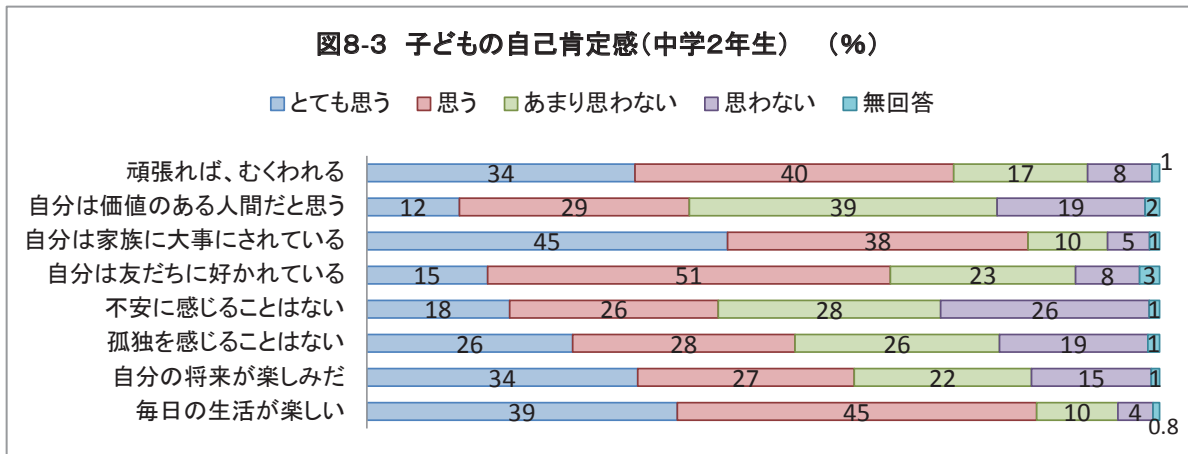


男子と女子を比べると、男子は女子に比べ「自分は価値のある人間だ」と思う割合が高く、また、「不安に感じることはない」「孤独を感じることはない」とする割合も高くなります。その他の項目では性別による差は統計的に有意ではありませんでした。

**図8-2 子どもの自己肯定感(小学5年生): 性別 (%)**

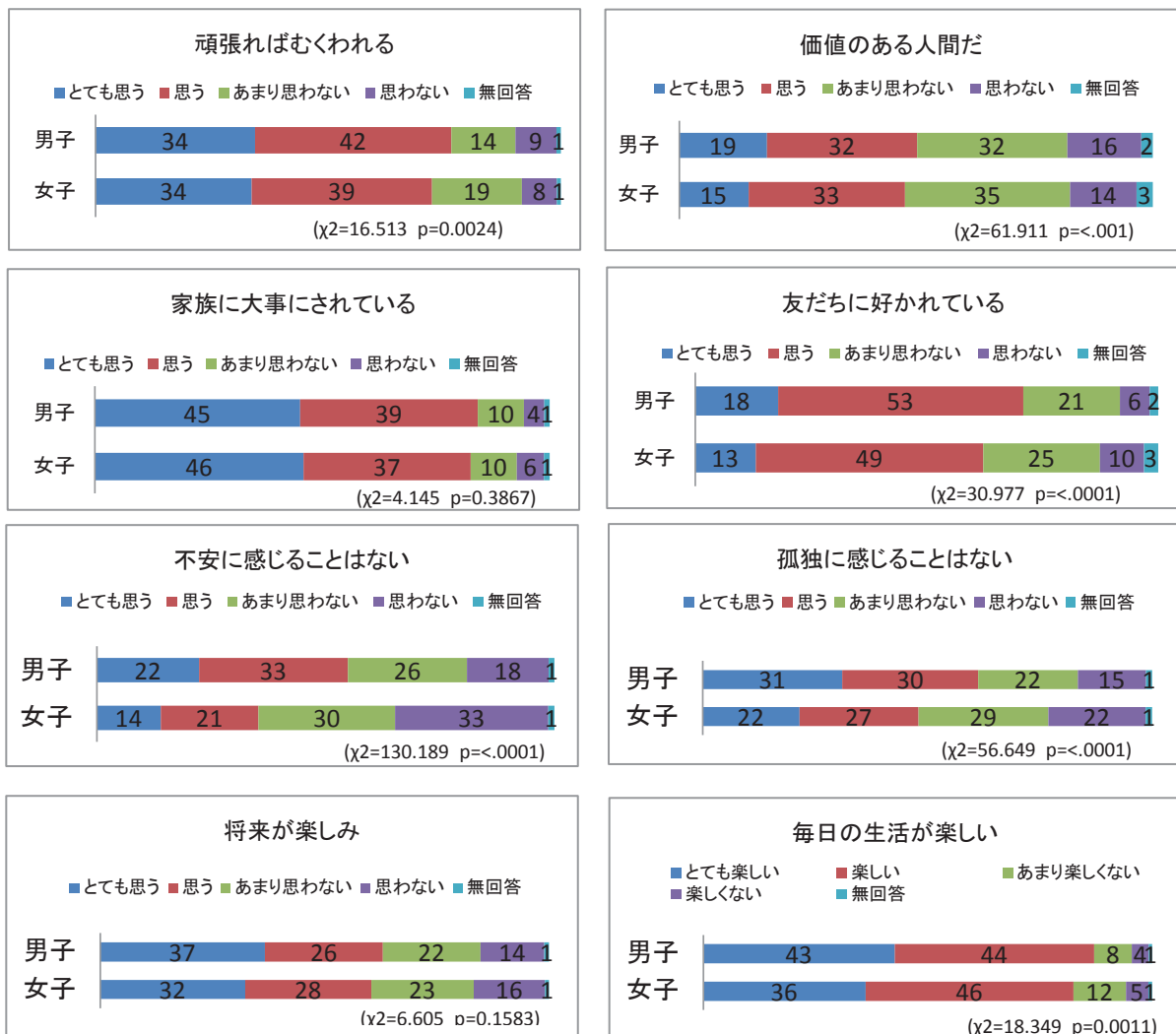


中学2年生になると、すべての項目において「とても思う」と答えた子どもの割合が少なくなります。「頑張れば、むくわれる」については、さほど大きな差はありませんが、その他の項目については小学生と中学生の間に大きな差が見られます。特に、「自分の将来が楽しみだ」については、「とても思う」が59%から34%と大きく減少しており、これは前掲の「夢」の有無とも関係していると考えられます。

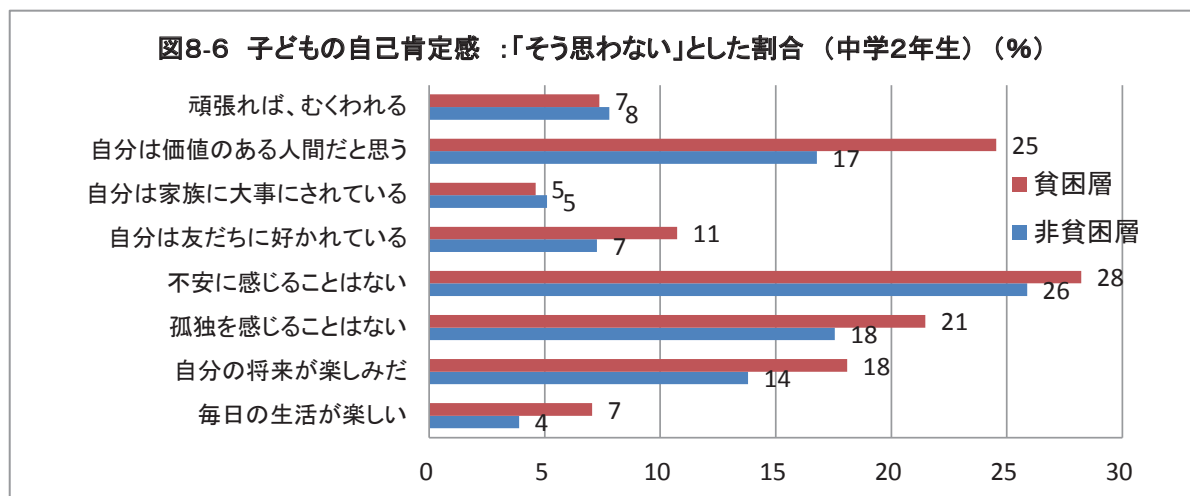
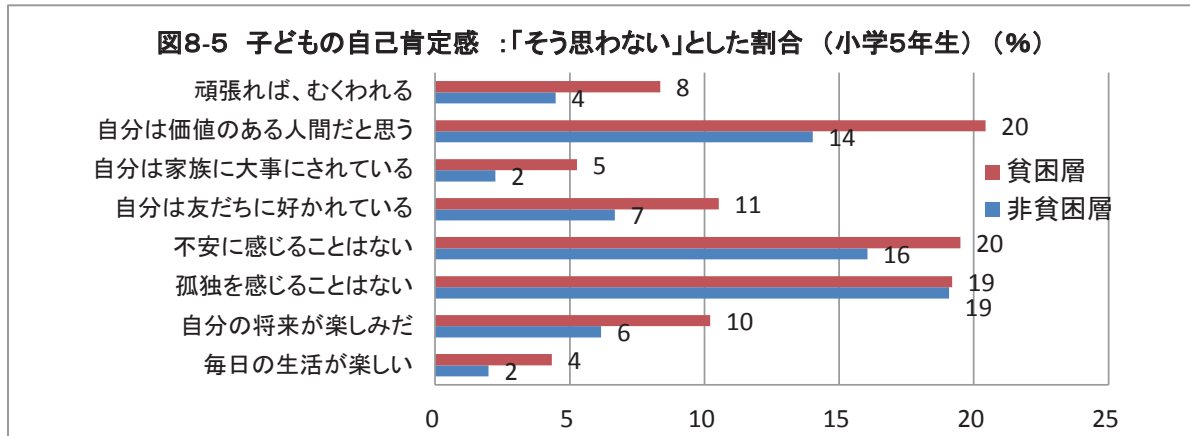


男子と女子と比べると、「家族に大事にされている」「自分の将来が楽しみだ」以外の6つの項目で、男子の方が女子よりも肯定的な回答をした割合が高くなっていることがわかります。中学2年生では、男子の方が女子に比べて自己肯定感が高いようです。

**図8-4 子どもの自己肯定感(中学2年生): 性別 (%)**

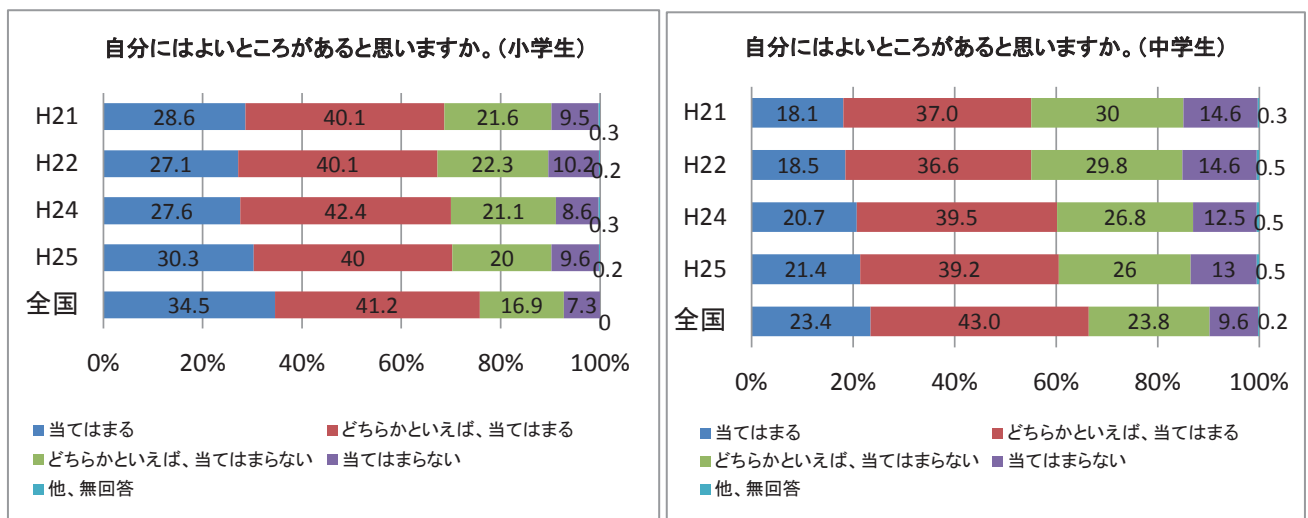


子どもの自己肯定感は、家庭の経済状況と密接に関係しています。それぞれの項目に「思わない」とした子どもの割合を貧困／非貧困層別に見ると、どの項目にも大きな差がありました。特に、「自分は価値のある人間だと思う」については、小学5年生では6%、中学2年生では8%の差が見られました。



**【参考】**

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」においても、質問紙調査にて「自尊感情」を調査しています。これによると、大阪市では、全国平均に比べて、「自分には、よいところがあると思いますか」という問いに対して「当てはまる」とした児童生徒の割合が低くなっています。しかしながら、この割合は平成21年度より上昇傾向にあります。



(出所：大阪市教育委員会「平成25年度 大阪市「全国学力・学習状況調査」の結果について」)

## 9. クラブ活動と習い事

ここからは、保護者の方に答えていただいた回答から集計をしています。

まず、クラブ活動・部活動と習い事について聞きました。小学5年生の58%、中学2年生の81%は、何らかのクラブ活動をしています(保護者回答)。クラブ活動の参加率は、小学5年生においては貧困層とそうでない層の差がたいしてありませんが、中学2年生になるとその差が統計的に有意になり、約9%となります。

表9-1 クラブ活動、部活動への参加

		小学5年生				中学2年生			
		度数	(%)	貧困 (%)	非貧困 (%)	度数	(%)	貧困 (%)	非貧困 (%)
クラブ活動	している	1819	58%	59%	55%	2325	81%	74%	83%
	していない	1254	40%	40%	41%	515	18%	24%	17%
	無回答	76	2%	2%	4%	35	1%	1%	0.8%

(χ<sup>2</sup>=9.899, p=0.007) (χ<sup>2</sup>=12.528, p=0.002)

クラブ活動・部活動の種類は多種多様です。問9で「している」と答えた方へ活動の種類を聞いたところ、小学5年生では「サッカー」が最も多く、次が「野球」、中学2年生では「バスケットボール」が1位、「野球」が2位となっていました。しかし、両者ともに「その他」が3~4割となっており、子どもたちが、さまざまなクラブ活動にかかわっていることがわかります。

表9-2 クラブ活動、部活動の種類

	小学5年生 (n=1819)				中学2年生 (n=2325)			
	している	貧困	非貧困	している	貧困	非貧困		
	度数	(%)	(%)	度数	(%)	(%)		
1. 水泳	127	7%	6%	96	4%	3%		
2. 野球	170	9%	8%	232	10%	11%		
3. ソフトボール	146	8%	7%	31	1%	2%		
4. サッカー	299	16%	15%	180	8%	6%		
5. 卓球	97	5%	3%	90	4%	4%		
6. テニス	31	2%	1%	198	9%	4%		
7. (ミニ)バスケットボール	108	6%	4%	253	11%	15%		
8. バレーボール	54	3%	2%	145	6%	5%		
9. 剣道・柔道などの武道	75	4%	3%	110	5%	4%		
10. コーラス	14	0.8%	0%	9	0.4%	1%		
11. 読書	22	1%	2%	17	0.7%	0.4%		
12. ブラスバンド	46	3%	4%	218	9%	12%		
13. 体操	34	2%	0.6%	12	0.5%	0%		
14. その他	786	43%	46%	791	34%	34%		

習い事については、クラブ活動・部活動よりも家庭の経済状況による差が顕著に表れています。小学校5年生では、全体の82%が何らかの習い事をしてますが、貧困層では62%、非貧困層では86%となっており、その差は24%もあります。中学2年生では、この差は21%でした。

表9-3 習い事の有無

		小学5年生				中学2年生			
		度数	(%)	貧困 (%)	非貧困 (%)	度数	(%)	貧困 (%)	非貧困 (%)
習い事	している	2574	82%	62%	86%	2034	71%	54%	75%
	していない	531	17%	38%	14%	788	27%	42%	24%
	無回答	44	1%	(該当サンプルなし)		53	2%	4%	1%

(χ<sup>2</sup>=119.266, p=0.000) (χ<sup>2</sup>=73.248, p=0.000)

習い事の種類では、小学5年生、中学2年生ともに圧倒的多数で多かったのは「学習塾」(小学生38%、中学生74%)でした。小学5年生では、他の習い事(水泳25%、そろばん18%、ピアノ・オルガン17%、英会話15%等)も多くの子どもが習っていますが、学習塾以外の習い事は中学2年生になると大きく減少し、10%を超えるものはピアノ・オルガンのみとなります。

表9-4 習い事の種類

	小学5年生 (n=2574)				中学2年生 (n=2034)			
	している		貧困	非貧困	している		貧困	非貧困
	度数	(%)	(%)	(%)	度数	(%)	(%)	(%)
1. 体操	105	4%	3%	4%	18	0.9%	0%	1%
2. 水泳	656	25%	16%	27%	95	5%	2%	5%
3. 野球・ソフトボール	225	9%	11%	9%	78	4%	5%	4%
4. サッカー	306	12%	13%	12%	61	3%	2%	3%
5. テニス	66	3%	0%	3%	28	1%	0%	1%
6. バスケットボール	47	2%	2%	2%	27	1%	3%	1%
7. 卓球	8	0.3%	0%	0.4%	11	0.5%	1%	0.4%
8. バレーボール	26	1%	2%	1%	13	0.6%	0%	0.5%
9. 剣道・柔道などの武道	230	9%	7%	9%	108	5%	10%	5%
10. バレエ、ダンス、舞踏	207	8%	7%	8%	94	5%	4%	5%
11. 英会話	396	15%	8%	16%	133	7%	6%	7%
12. 外国語(英語以外)	8	0.3%	2%	0.2%	4	0.2%	0%	0.1%
13. そろばん	457	18%	18%	17%	52	3%	1%	2%
14. 習字(硬筆含む)	423	16%	18%	16%	106	5%	3%	5%
15. 絵・工作	46	2%	1%	2%	22	1%	0.6%	1%
16. ピアノ・電子オルガン	446	17%	8%	18%	206	10%	5%	11%
17. 楽器(ピアノ・電子オルガン以外)	79	3%	2%	3%	0	0%	0%	0%
18. ボーイスカウト・ガールスカウト	19	0.7%	1%	0.7%	3	0.1%	0.6%	0.1%
19. 科学・自然	15	0.6%	1%	0.7%	4	0.2%	1%	2%
20. 華道・茶道	12	0.5%	1%	0.5%	9	0.4%	1%	0.4%
21. 学習塾	987	38%	25%	40%	1513	74%	67%	75%
22. 家庭教師	29	1%	0%	1%	63	3%	4%	3%
23. 通信教育	366	14%	7%	15%	174	9%	4%	9%
24. その他	223	9%	13%	9%	97	5%	3%	5%

図9-1 クラブ活動、部活動の種類 (小学5年生) (%)

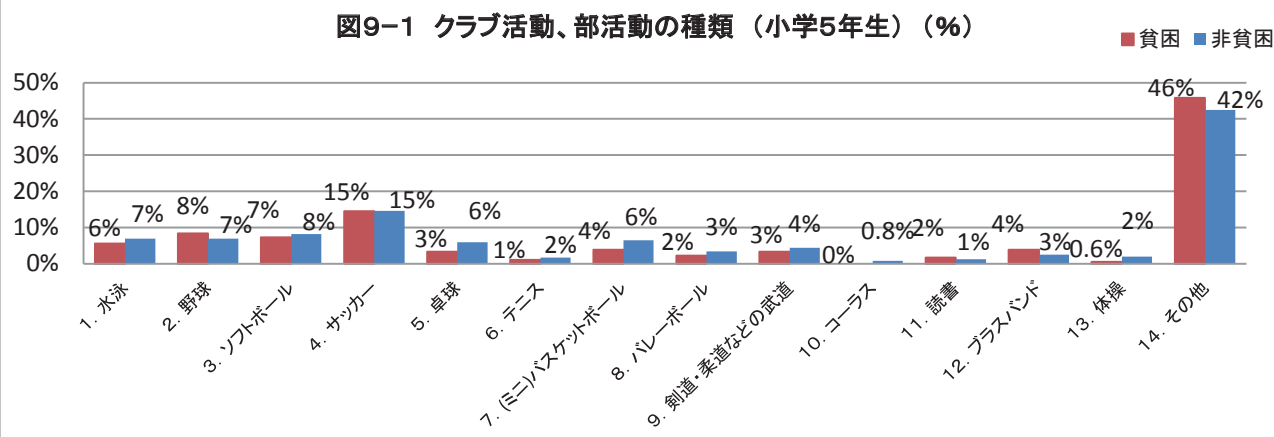


図9-2 クラブ活動、部活動の種類 (中学2年生) (%)

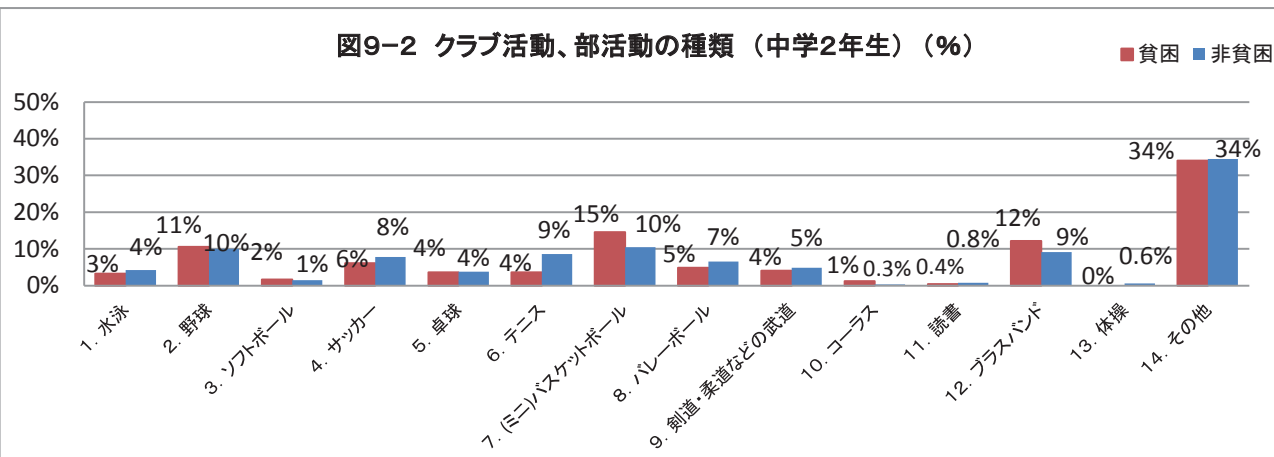


図9-3 習い事の種類（小学5年生）（%）

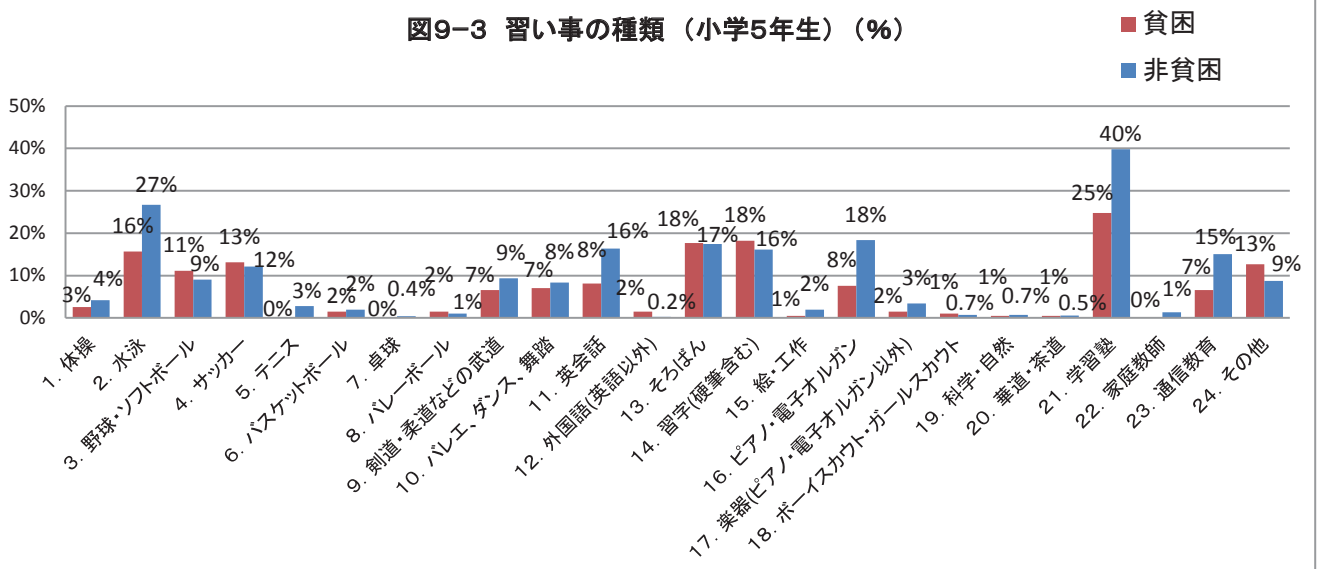
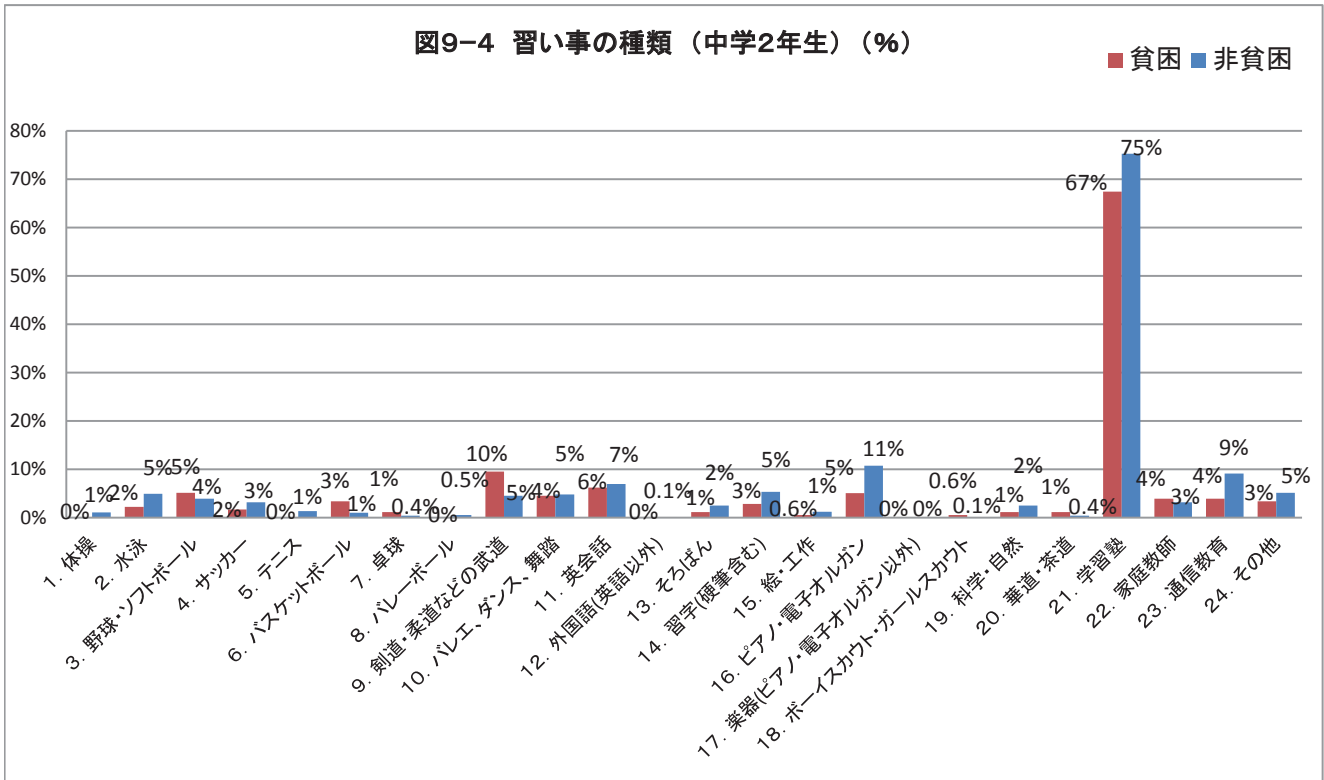


図9-4 習い事の種類（中学2年生）（%）





## 10. 就学援助費を受け取っていますか

保護者の方に、就学援助費について伺いました。回答した小学5年生の保護者の25%、中学2年生の31%は就学援助費を受け取っているとしています。大阪市における就学援助費認定率は、平成24年度で小学校30.3%、中学校37.6%となので(大阪市教育委員会)、本調査の回答者は大阪市立の小中学校に通う児童生徒全体に比べて、若干、就学援助費受給者が受けていない人に偏っていることがわかります。

就学援助費を受け取っている保護者のうち、小学5年生の保護者の約半数(51%)は就学援助費によって必要な経費が「カバーできている」と答えており、「十分にカバーできている」(13%)を合わせると6割以上となっています。この割合は、中学2年生になるとぐっと減り、「カバーできている」は40%、「十分にカバーできている」は6%となっています。「あまりカバーできていない」としたのは小学5年生で26%、中学2年生では34%、「カバーできていない」としたのは小学5年生で9%、中学2年生で20%でした。

就学援助を受け取っていないと答えた保護者のうち、小学5年生の保護者の26%、中学2年生の保護者の29%は「必要であるが申請要件を満たしていない」ので申請しなかったとしています。また、少なくない保護者が「申請したが、認定されなかった」(小学5年生7%、中学2年生9%)、「就学援助制度を知らなかった」(小学5年生2%、中学2年生2%)と答えています。

表10-1 就学援助費を受け取っていますか

	小学5年生		中学2年生	
	n	(%)	n	(%)
受け取っている	795	25%	889	31%
受け取っていない	2285	73%	1915	67%
わからない	28	0.9%	35	1%
無回答	41	1%	36	1%
	3149	100%	2875	100%

表10-2

	小学5年生		中学2年生	
	度数	(%)	度数	(%)
十分カバーできている	106	13%	52	6%
カバーできている	406	51%	353	40%
あまりカバーできていない	204	26%	301	34%
カバーできていない	71	9%	177	20%
無回答	8	1%	6	0.7%
	795	100%	889	100%

表10-3

	小学5年生		中学2年生	
	度数	(%)	度数	(%)
申請しなかった(必要だが申請要件を満たしていない)	583	26%	563	29%
申請しなかった(必要でない)	1368	60%	1047	55%
申請したが、認定されなかった	169	7%	172	9%
就学援助制度を知らなかった	55	2%	33	2%
その他	59	3%	44	2%
無回答	51	2%	56	3%
	2285	100%	1915	100%

図10-1 就学援助費を受け取っていますか（保護者）（％）

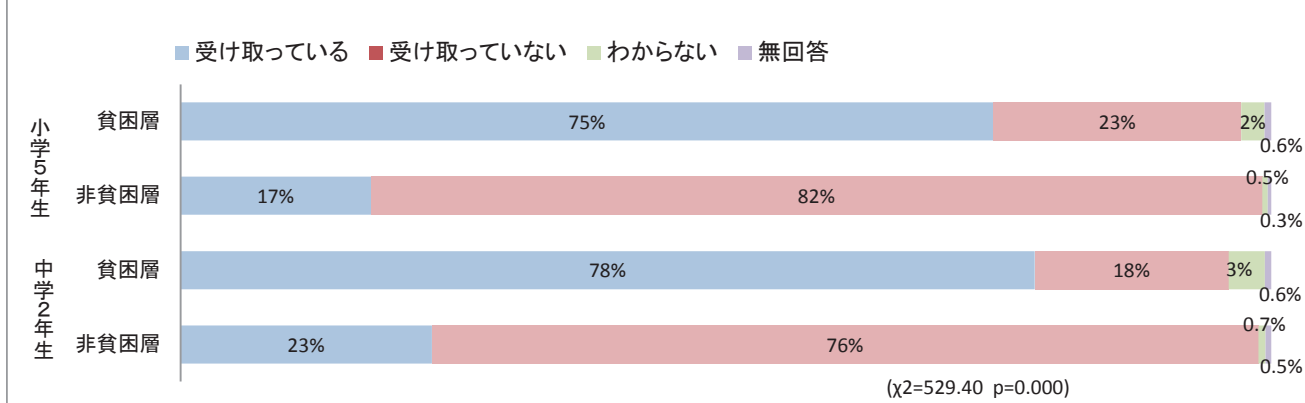


図10-2 就学援助費で必要経費をカバーできていますか（保護者）（％）

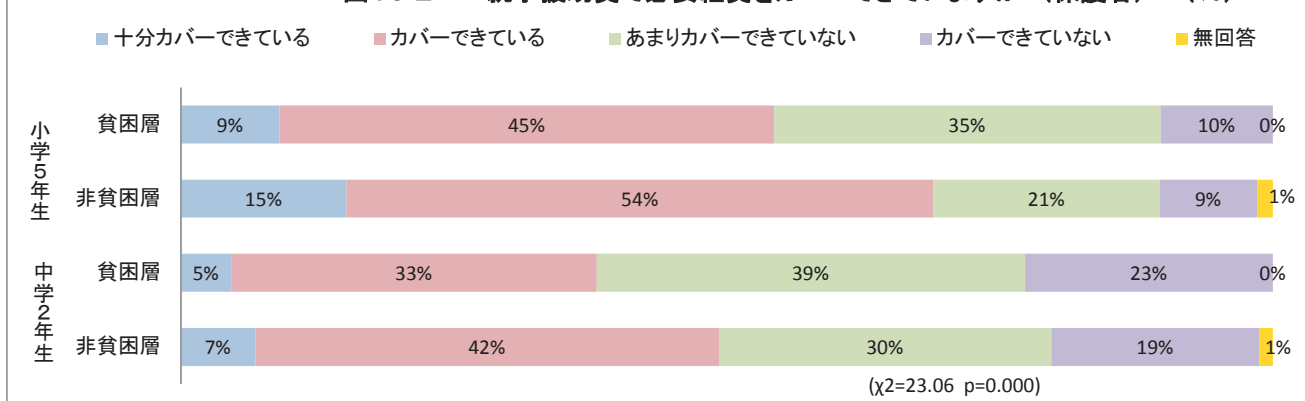
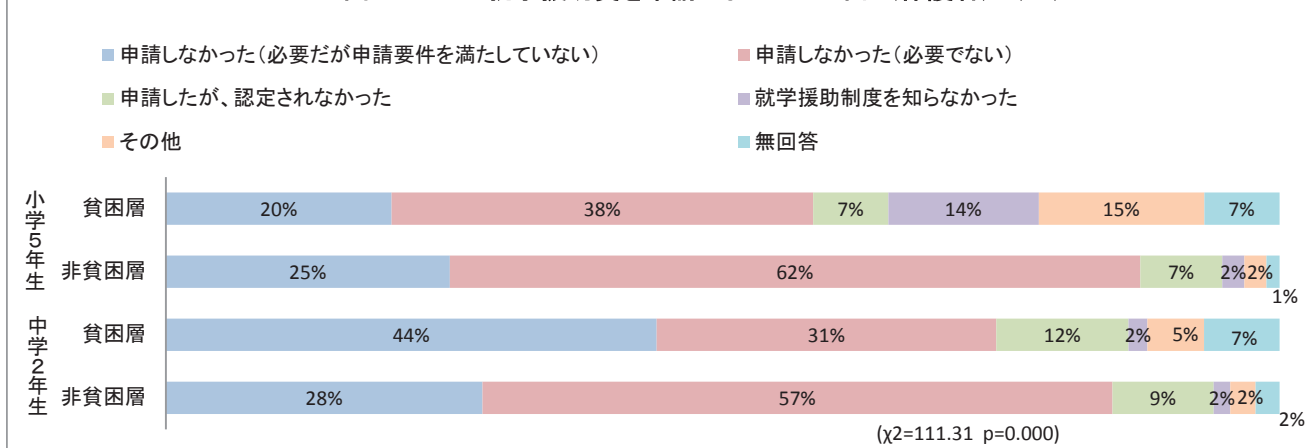


図10-3 就学援助費を申請しなかった理由（保護者）（％）



# 11. 子どもの進学に関する意識

小学5年生の保護者も中学2年生の保護者も、約8割は子どもに高校までの教育を受けさせたいと考えています。また、約6割の保護者は、子どもに「短大・高専・専門学校までの教育」「大学およびそれ以上の教育」を受けさせたいと考えています。しかし、保護者の1割から2割は、これらの教育を子どもに受けさせることが経済的な理由でできないと答えています。小学5年生の保護者の場合、それぞれ21%と12%が「大学およびそれ以上」、また、「短大・高専・専門学校」の教育を子どもに受けさせたいが、経済的な理由で受けさせることができないと考えています。中学2年生の保護者の場合は、その比率が25%と16%に上がります。このような教育を受けさせたくないと考えている保護者は少数です(小学5年生、中学2年生ともに約3%)。

高校までの教育に関しては、「経済的に受けさせられない」という回答はごくわずかでした(小学5年生、中学2年生ともに0.4%)。

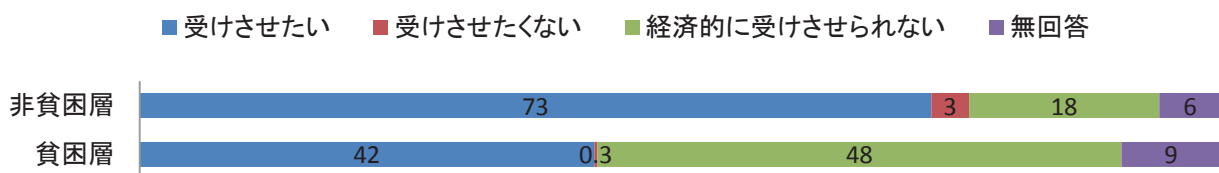
表11-1 どの段階までの教育を受けさせたいか

	小学5年生				中学2年生			
	受けさせたい	受けさせない		無回答	受けさせたい	受けさせない		無回答
		受けさせたくない	経済的に受けさせられない			受けさせたくない	経済的に受けさせられない	
(%)								
高校までの教育	82	0.2	0.4	18	81	0.2	0.4	18
短大・高専・専門学校までの教育	65	3	12	20	61	3	16	20
大学およびそれ以上の教育	68	3	21	8	61	3	25	11

子どもの進学に関する意識は、保護者の経済状況によって大きく異なります。小学5年生の保護者では、非貧困層の保護者の73%、貧困層の保護者の42%が、「大学またはそれ以上の教育」を受けさせたいと考えており、30%近い差があります。一方で、非貧困層の保護者の18%が「経済的に受けさせられない」としているのに対し、貧困層の保護者では、この割合が48%となっています。

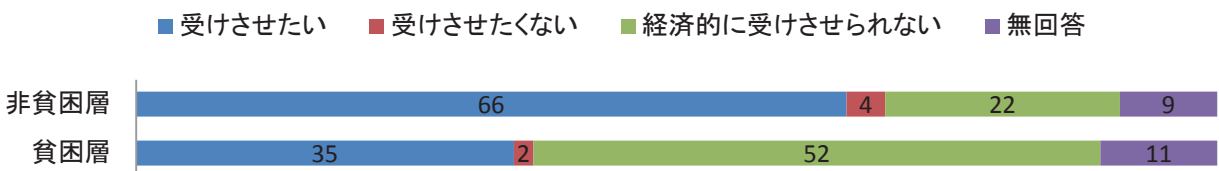
中学2年生の保護者では、非貧困層の保護者の66%は「大学またはそれ以上の教育」を子どもに受けさせたいと考えていますが、その割合は貧困層では35%となります。その差は、階層間において「経済的に受けさせられない」という回答の割合の差によってほぼ説明できます。

図11-1 大学それ以上の教育を子どもに受けさせるか（小学5年生の保護者）（%）



( $\chi^2=183.6, p < .0001$ )

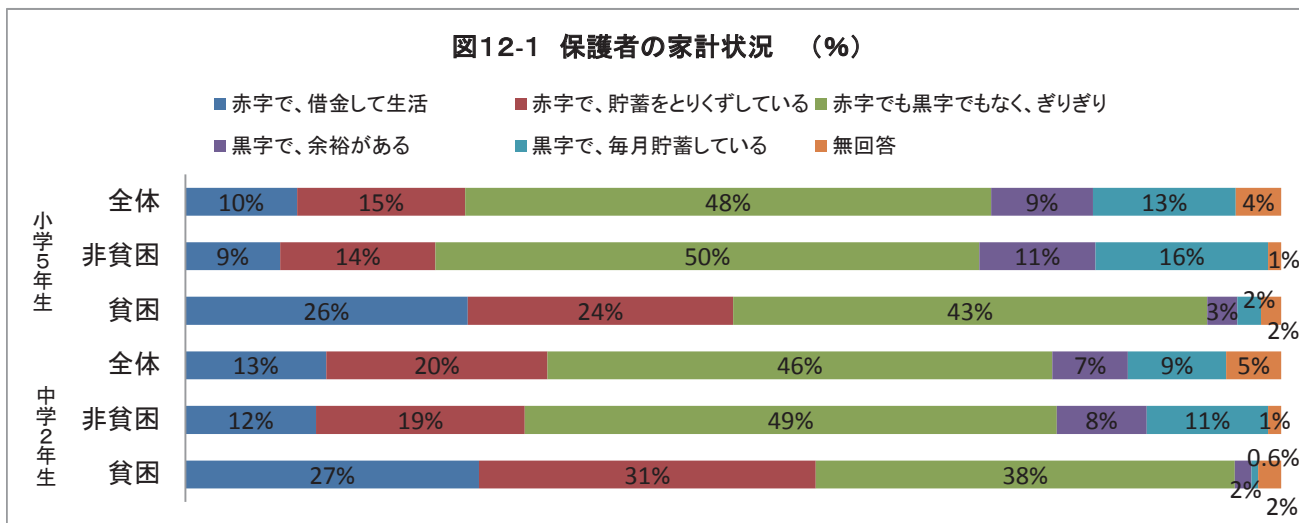
図11-2 大学それ以上の教育を子どもに受けさせるか（中学2年生の保護者）（%）



( $\chi^2=152.541, p < .0001$ )

## 12. 家計と子どもへの支出

子どものある世帯の家計は一般的にゆとりがありませんが、本調査でも同じ傾向が見られます。家計が「赤字であり貯蓄をしている」とした世帯は小学5年生の保護者では13%、中学2年生の保護者では9%となりますが、「赤字であり借金をして生活をしている」も10%(小学5年生)、13%(中学2年生)存在します。



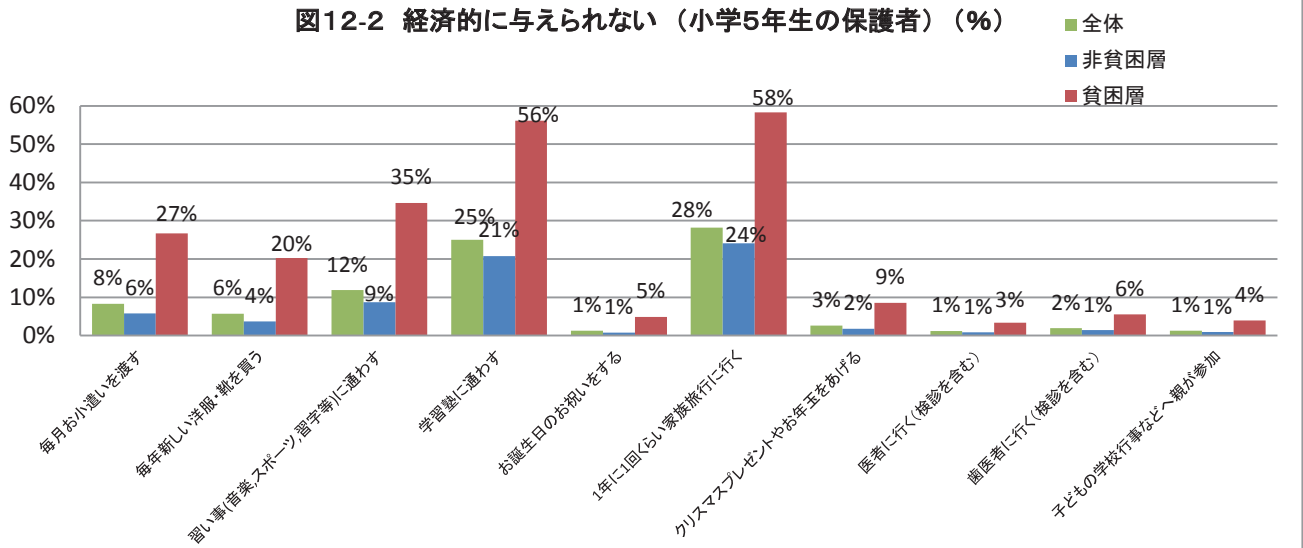
( $\chi^2=156.36$  122.84, 全項目とも  $p=0.000$ )

以下の10項目について、子どもに与えているかを聞きました。多くの項目について、9割以上の保護者が子どもに「与えている」と回答しています。しかし「経済的に与えることができない」と回答した保護者もいます。小学5年生では、約4分の1の保護者が「学習塾に通わず」(25%)、「1年に1回くらい家族旅行に行く」(28%)ことができないと答えています。中学2年生では、約5分の1の保護者が「習い事に通わず」(23%)、「学習塾に通わず」(21%)ことができないとしています。

表12-1 子どもへの支出

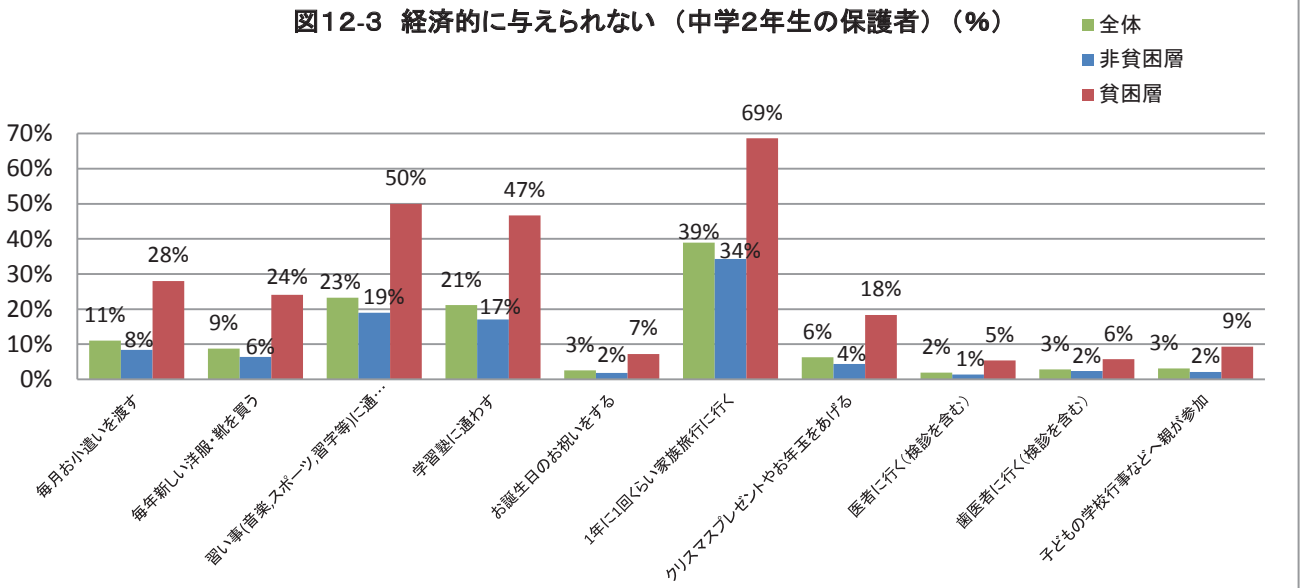
支出項目 (%)	小学5年生				中学2年生			
	与えている	与えていない		無回答	与えている	与えていない		無回答
		与えたくない	経済的に与えられない			与えたくない	経済的に与えられない	
毎月、お小遣いを渡す	54	35	8	3	69	17	11	3
毎年、新しい洋服・靴を買う	89	3	6	2	86	3	8	2
習い事(音楽、スポーツ、習字等)に通わず	79	6	12	3	53	17	23	7
学習塾に通わず	39	30	25	6	60	14	21	5
お誕生日のお祝いをする	97	0.4	1.2	1.2	95	1	2	1
1年に1回くらい家族旅行に行く	64	3	28	4	51	5	4	5
クリスマスのプレゼントやお正月のお年玉をあげる	95	0.9	3	1	90	2	6	2
医者に行く(検診を含む)	97	0.7	1	1	95	1	2	2
歯医者に行く(検診を含む)	95	1	2	2	93	2	3	3
子どもの学校行事などへ親が参加する	96	2	1	1	90	5	3	3

図12-2 経済的に与えられない（小学5年生の保護者）（%）



( $\chi^2=114.62$  151.19 186.59 200.32 40.56 165.98 55.73 19.79 26.99 40.40, 全項目とも  $p=0.000$ )

図12-3 経済的に与えられない（中学2年生の保護者）（%）



( $\chi^2=114.62$  112.87 154.66 151.31 34.82 147.69 97.45 27.62 12.44 71.49,  $p=0.000$  0.000 0.000 0.000 0.000 0.000 0.000 0.000 0.000 0.000)

# 13. 子どもとの関係

次に、保護者の方にお子さんとの関係について、4つの問い(「お子さんとよく会話をしますか」「お子さんと十分に時間を過ごしていますか」「お子さんの将来の夢を知っていますか」「お子さんを信頼していますか」)を聞きました。

まず、会話については、小学5年生の保護者の64%、中学2年生の保護者の57%が「よくする」と回答しており、「する」(小学5年生33%、中学2年生38%)を合わせると、9割以上の保護者が子どもと話をしています。しかし、子どもと会話を「よくする」のは、非貧困層の方が、貧困層に比べ高い傾向があります。

表13-1 お子さんとよく会話をしますか

	小学5年生				中学2年生			
	度数	(%)	貧困層 (%)	非貧困層 (%)	度数	(%)	貧困層 (%)	非貧困層 (%)
よくする	2011	64	55	65	1638	57	51	58
する	1034	33	40	32	1090	38	43	37
あまりしない	79	3	4	2	127	4	6	4
しない	3	0.1	0	0.1	6	0.2	0.3	0.2
無回答	22	0.7	0.6	0.3	14	0.5	0.3	0.1

( $\chi^2=15.60$   $p=0.0036$ )

( $\chi^2=7.842$ ,  $p=0.098$ )

「お子さんと十分に時間を過ごしていますか」の問いに対しては、小学5年生、中学2年生の保護者ともに約半数(小学5年生50%、中学2年生51%)の保護者が「過ごしている」としています。これについても、貧困層と非貧困層の間には統計的に有意な差があり、この傾向は中学生の保護者のほうが強くなっています。

表13-2 お子さんと十分に時間をすごしていますか

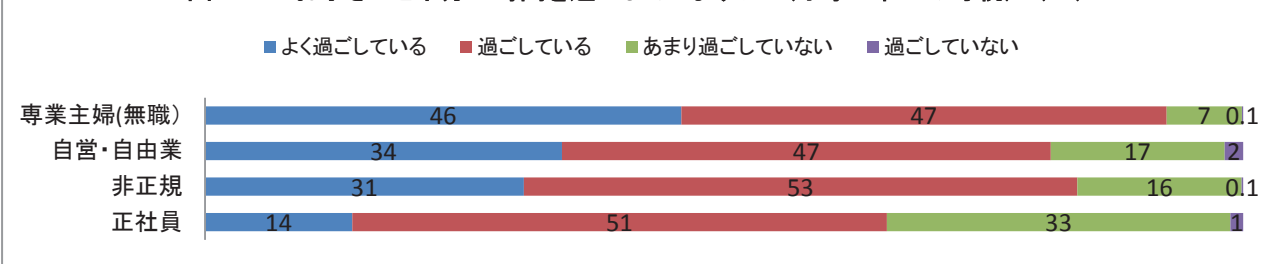
	小学5年生				中学2年生			
	度数	(%)	貧困層 (%)	非貧困層 (%)	度数	(%)	貧困層 (%)	非貧困層 (%)
よく過ごしている	1024	33	30	33	723	25	20	25
過ごしている	1568	50	48	51	1461	51	46	51
あまり過ごしていない	517	16	21	16	638	22	31	22
過ごしていない	16	0.5	0.9	0.4	33	1	2	0.9
無回答	24	0.8	0.6	0.3	20	0.7	0.3	0.3

( $\chi^2=8.13$   $p=0.087$ )

( $\chi^2=17.266$ ,  $p=0.002$ )

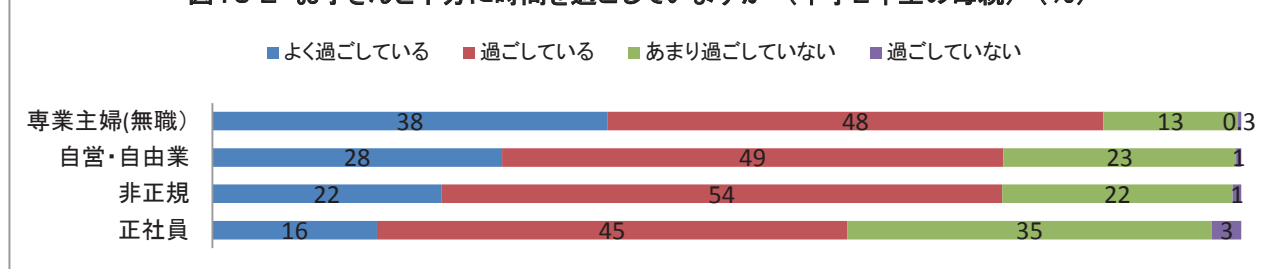
お子さんと過ごす時間は、母親(回答者の8~9割)の就労状況によって大きく異なります。「よく過ごしている」の割合は、専業主婦(無職) > 自営・自由業 > 非正規 > 正社員の順に少なくなります。

図13-1 お子さんと十分に時間を過ごしていますか (小学5年生の母親) (%)



( $\chi^2=121.0606$   $p<.0001$ )

図13-2 お子さんと十分に時間を過ごしていますか (中学2年生の母親) (%)



( $\chi^2=131.965$   $p<.0001$ )



子どもの夢については、小学5年生の保護者は30%、中学2年生の保護者は18%が「よく知っている」、また、両者ともに44%の保護者が「知っている」と回答しています。中学2年生の保護者には、家庭の経済状況による差が若干見られましたが、小学5年生の保護者には見られませんでした。

表13-3 お子さんの将来の夢を知っていますか

	小学5年生				中学2年生			
	度数	(%)	貧困層 (%)	非貧困層 (%)	度数	(%)	貧困層 (%)	非貧困層 (%)
よく知っている	928	29	27	30	509	18	16	19
知っている	1397	44	42	45	1247	43	41	44
あまり知らない	658	21	25	20	881	31	33	30
知らない	136	4	6	4	200	7	9	7
無回答	30	1	0.6	0.5	38	1	0.6	0.7

( $\chi^2=5.69$   $p=0.2237$ )

( $\chi^2=6.654$ ,  $p=0.155$ )

「お子さんを信頼していますか」の問いについては、「たいへん信頼している」(小学5年生42%、中学2年生37%)、「信頼している」(小学5年生53%、中学2年生57%)と、9割以上の保護者が肯定的な回答をしています。しかしながら、「あまり信頼していない」(小学5年生4%、中学2年生5%)と答えている保護者もあり、この割合は貧困層の保護者の方が高くなっています。特に、中学2年生の保護者においては、貧困層／非貧困層の差は2倍となっています。

表13-4 お子さんを信頼していますか

	小学5年生				中学2年生			
	度数	(%)	貧困層 (%)	非貧困層 (%)	度数	(%)	貧困層 (%)	非貧困層 (%)
たいへん信頼している	1320	42	37	44	1051	37	34	37
信頼している	1655	53	56	52	1644	57	55	57
あまり信頼していない	130	4	6	4	155	5	10	5
信頼していない	11	0.3	0.6	0.3	6	0.2	0.9	0.1
無回答	33	1	0.9	0.6	19	0.7	0.6	0.3

( $\chi^2=9.30$   $p=0.0541$ )

( $\chi^2=20.843$ ,  $p=0.000$ )

## 14. 医療サービスの受診状況

「過去1年間に医療機関で(お子さんを)受診させた方がよいと思ったが、実際には受診させなかったことがありましたか」という問いに対しては、小学5年生、中学2年生の保護者ともに20%が「ある」と答えています。その理由を聞くと、「最初は受診させようと思ったが、子どもの様子を見て、受診させなくても良いと判断した」が最も多く約半数を占めてはいますが、約2割は「多忙で、医療機関に連れて行く時間がなかった」、約1割が「医療機関で自己負担金を支払うことができなかった」としています。

表14-1 過去1年間に医療機関でお子さんを受診させなかったことがありましたか

	小学5年生				中学2年生			
	度数	(%)	貧困層 (%)	非貧困層 (%)	度数	(%)	貧困層 (%)	非貧困層 (%)
ある	643	20	27	20	570	20	24	20
なし	2444	78	71	79	2251	78	74	73
無回答	62	2	2	0.8	54	2	2	1

(小学5年生:  $\chi^2=12.812, p=0.002$ ) (中学2年生:  $\chi^2=5.725, p=0.057$ )

表14-2 その理由はなんですか

	小学5年生		中学2年生	
	度数	(%)	度数	(%)
総数	643	100	570	100
公的医療保険に加入しておらず、医療費の支払いができなかった	5	0.8	6	1
公的医療保険に加入していたが、医療機関で自己負担金を支払うことができなかった	72	11	56	10
本人が(行くのが)嫌だと言ったため	49	8	98	17
医療機関までの距離が遠く、通院することが困難であった	3	0.5	1	0.2
多忙で、医療機関に連れて行く時間がなかった	115	18	123	22
最初は受診させようと思ったが、子どもの様子を見て、受診させなくても良いと判断	348	54	240	42
その他の理由	34	5	27	5
無回答	17	3	19	3

保護者から見て、子どもの健康状況を5段階で評価してもらったところ、小学5年生では64%、中学2年生の56%は「良い」と回答しています。「まあ良い」までも合わせると、8割以上の子どもの健康状況は良好であると保護者に判断されています。

図14-1 保護者から見た子どもの健康状況 (%)

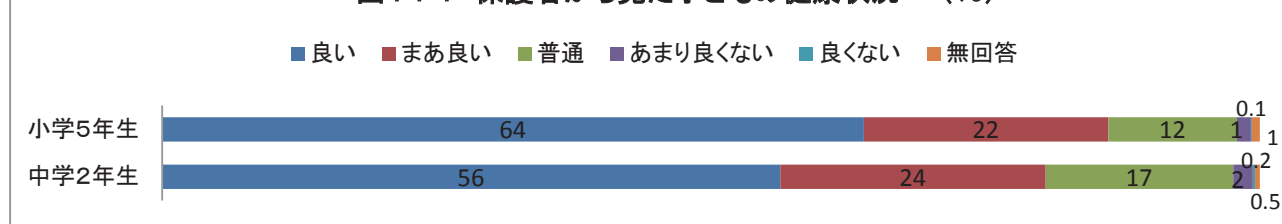
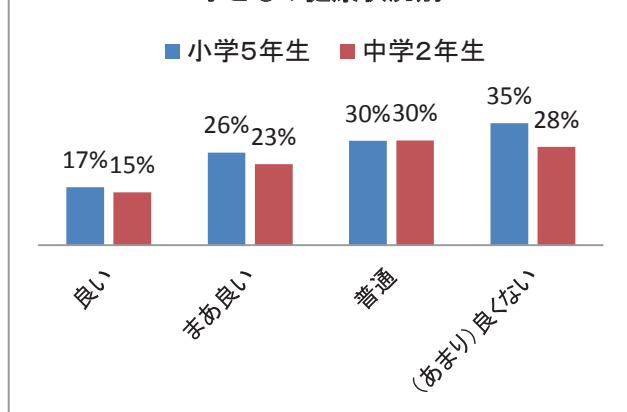


図14-2 受診抑制があった割合 : 子どもの健康状況別



(小学5年  $\chi^2=59.27, p<.0001$  中学2年  $\chi^2=60.51, p<.0001$ )

しかし、子どもの健康状況別に受診抑制の有無を見ると、明らかな関係があります。子どもの健康状況が良いほど、受診抑制の経験が少なくなっています。

(注: 「良くない」と「あまり良くない」は度数が少ないため合算している)

# 考察

同志社大学社会学部 埋橋孝文  
武庫川女子大学文学部 矢野裕俊

本調査は文部科学省科研費研究「貧困に対する子どものコンピテンシーをはぐくむ福祉・教育プログラム開発」(2011～2013年度)の一環として企画、実施されました。この研究の大きな目的は、「どうすれば親の貧困が子どもたちに及ぼす負の影響・連鎖を断ち切ることができるのか」を明らかにすることですが、それを明らかにするためには、まず、「貧困は子どもにどのような影響を与えているのか」を実証的に検討する必要があるため、そのために本調査が実施されました。調査結果が所得階層(貧困と非貧困)に分けて集計され分析されているのもそうした理由によるものです。

以下では、まず、今回の調査の単純集計結果を要約し、示唆する点や有意点をまとめます。次いで、貧困層の子どもと非貧困層の子どもの回答の違いについてまとめます。

## 1. 単純集計結果が示唆するもの

### A 子ども調査

#### 1) 将来の夢について

将来の夢が「ある」とする回答に注目すると、小学5年生ではほぼ8割と高いが、中学2年生になると約6割と明らかに低くなっていること、また小・中学生ともに男子よりも女子が高いという結果が得られました。過去の類似の調査結果として、「第2回子ども生活実態基本調査」2009年、ベネッセ教育総合研究所以下「ベネッセ調査」がありますが、「将来、なりたい職業はありますか」との問いに「ある」とする回答が、小学生58.1%、中学生54.2%とさほど大きな差がなかったことと比べると、このたびの調査結果でみられた小学生と中学生の差が大きいことは気になることです。「ベネッセ調査」では、「なりたい職業」の上位が小学生では、「野球選手、サッカー選手、医師、研究者・大学教員、大工、ゲームクリエイター・ゲームプログラマー」(男子)、「ケーキ屋さん・パティシエ、保育士・幼稚園の先生、芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)、看護師、デザイナー・ファッションデザイナー」(女子)、中学生では、「野球選手、サッカー選手、芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)、学校の先生、調理師・コック」(男子)、「保育士・幼稚園の先生、芸能人(俳優・声優・お笑いタレントなど)、ケーキ屋さん・パティシエ、看護師、マンガ家・イラストレーター」(女子)という結果であったことと比較すると、このたびの調査結果では、「警察官・消防士・自衛隊」(中学2年生男子3位)、「公務員・会社員・サラリーマン」(中学2年生男子7位)、「美容師・ネイリスト・メイクアップアーティスト」(中学2年生女子4位)など、特に中学生において、将来の夢(なりたい職業)がより現実的になっているようです。

「将来の夢がない」理由が、「具体的に、何も思い浮かばないから」という回答が小学6年生で6割、中学2年生で7割に上っていることも注目されます。そもそも自分の将来について考えることに興味がない子どもや、考えても具体的な職業名に結びつくまでには至らない子どもが多いということがうかがえます。

教育の課題としては、「将来の夢がない」「わからない」という子どもたちへの働きかけがどうあるべきなのかを考えなければなりません。

#### 2) 物品の所有状況について

物品の所有状況では、特に携帯電話の所有に注目してみます。2009年実施の「ベネッセ調査」では「持っている」が小学生26.2%、中学生50.1%であったことと比べると、44%(小学5年生)、71%(中学2年生)と、高い所持率であることがわかります。これは、子どもの携帯電話所有状況が、本調査が行われた2012年までのおよそ3か年の間に顕著に高まったことを反映している結果だとも考えられます。

#### 3) 放課後の過ごし方について

放課後の過ごし場所として、特に注目されるのは、中学2年生で経済的状況の違いによって、「塾や習い事」のみならず「学校(部活等)」にも有意な差がみられたことです。貧困層の生徒はそのどちらかが放課後の過ごし場所となる度合いが少ないようです。経済的状況が厳しい生徒の放課後の過ごし方をどのように考えればよいのか、という課題が見えてきます。

#### 4) 友だちについて、5) 会話について

友だちでは、小中学生ともに「学校の友だち」が圧倒的に多い。ところが、友だちとたくさん遊んでいるかどうかや、仲良くしているかどうか、友だちから好かれているかどうか、という点では、中学生になるとやや度合いが低くなっているようです。

困っていることや悩んでいること、楽しいことや悲しいことを話す相手としては、小学5年生では家族(親)が1位、友だちが2位ですが、中学2年生になると順位が逆転し、友だちが1位、家族(親)が2位になっています。注目すべきこととして、「学校の先生」はそうした話し相手としては低い順位にあります。学校の先生とは「あまり話さない」「ぜんぜん話さない」という回答の合計は、小学5年生で6割、中学2年生では7.5割に上ります。中学生でその割合が高く、「その他の大人(コーチ、塾先生)」とほぼ変わりません。また、誰とも話さないという回答が小学生で8%、中学生で10%あり、特に男子にその割合が高いことは注意が必要です。

教育の課題としては、学校の先生が子どもたちの話し相手や、相談する大人としての役割をしっかりと果たすためには何が必要なのかを考えなければなりません。

#### 6) 食事について

平日の朝食は家族と食べる子どもが最も多く、一人で食べる子どもは少ない。また、朝食を食べないという回答は、小学5年生で3%、中学2年生で7%で、「ベネッセ調査」では、「朝食をとらないで学校へ行く」とする回答の割合が小学生で8.4%、中学生で15.1%であったことと比べると低いことが分かります。ちなみに、平成25年度全国学力・学習状況調査での「朝食を毎日食べていますか」との質問に対する回答は、大阪市において「あまりしていない」「全くしていない」の合計が小学生で16.8%、中学生では20.6%で、いずれも全国平均を上回っています。

#### 7) 学校生活について

小学5年生は概して学校生活を楽しんでいることがうかがえます。それと比べると中学2年生では、「とても楽しみ」の割合がすべての項目で低下していることがわかります。「とても楽しみ」などの割合は小学5年生では、「学校の友だちに会うこと」、「学校の休み時間」、「体育・音楽・図工」、「学校のクラブ活動」、「学校給食(お弁当など)」の順に多くなっていますが、中学2年生では「学校の友だちに会うこと」、「学校の休み時間」、「学校の給食(お弁当など)」、「学校の部活動」の順です。友だちに会うことと休み時間が楽しみだという点では、小学5年生と中学2年生に共通しています。小学5年生では、体育・音楽・図工といった、教科の学習を楽しみにしている児童が多いことも注目したいところです。

学校の授業に関しては、小学5年生の「楽しみ」(「とても楽しみ」と「楽しみ」の合計)の割合が体育・音楽・図工で85%、その他の教科の授業も41%が比較的高いことがわかります。中学2年生になると、体育・技術家庭・音楽・美術・書道が56%、その他の教科が29%と、小学5年生に比べると低くなっていますが、それでも授業を楽しみとする回答がほぼ3割以上に上りました。

「先生に会うこと」が「楽しみ」だとする子どもの割合は、小学5年生で48%と約半数に上るのに対して、中学2年生では20%と著しく低くなっています。残念なことですが、中学2年生では、先生に会うことが「楽しみでない」とする回答の割合が全ての項目の中で最も高いことが注目されます。学校の先生が、会うことが楽しみな人とみなされ、子どもたちから慕われることは非常に大事なことであり、そうなるためには何が必要なのか、考えてみなければなりません。

#### 8) 子どもの自己肯定感について

「自分は価値ある人間だと思う」という項目に対する肯定的な回答(「とてもそう思う」と「そう思う」の合計)の割合が、小学5年生に比べて中学2年生になると48%から41%へと低下し、逆に否定的な回答(「あまり思わない」と「思わない」の合計)が48%から58%へと増えています。全体としては否定的な回答が肯定的な回答を上回っていることとなります。この項目では、貧困層と非貧困層の間の、肯定的な回答の割合の差が大きいことも注目されます。

ところが、「家族に大事にされている」と「友だちから好かれている」という項目に対しては、肯定的な回答が小学5年生でそれぞれ87%と66%、中学2年生でそれぞれ83%と66%で、あまり低くなっていません。また、「毎日の生活が楽しい」という項目に対する肯定的な回答は小学5年生で90%、中学2年生で84%と、大多数の子どもが日々の生活を楽しんでいるといえます。概して自分と自分の生活を肯定的にとらえているのですが、それが自分を価値ある人間だととらえるまでの、高い自己評価には至っていないということがわかります。



## B 保護者調査

### 9) クラブ活動と習い事

クラブ活動(部活動)は、小学4年生以上では原則として全員参加のはずであるにもかかわらず、回答をみると58%となっています。これはクラブ活動の実情が保護者には十分に知られていないことを反映しているかもしれません。中学2年生では、部活動参加率は81%で、中学校で活発に部活動が行われている実態がうかがえます。ただ、経済的状況が厳しい生徒(貧困層)の部活動参加率が有意に低いという結果が得られたことには留意しなければなりません。

経済的状況の違いは、「習い事の有無」ではより際だっており、状況が厳しい生徒の「習い事なし」の割合が高くなっています。

### 10) 子どもとの関係について

子どもとの会話については、小学5年生、中学2年生の保護者とともに肯定的な回答(「よくする」と「する」の合計)が9割をゆうに超えており、「子どもと十分に時間を過ごす」という項目でも、小学5年生、中学2年生の保護者で肯定的な回答はそれぞれ83%、76%と相当に高い。概して密な親子関係が築かれているといえます。

また、子どもへの信頼は、小学5年生、中学2年生の保護者ともに95%に近いことから、ほとんどの保護者が子どもを信頼していることがわかります。この結果は、「子ども調査」で「家族に大事にされている」と肯定的に回答する子どもが8割をゆうに超えているという結果とも符合するものであり、親子の間には信頼関係が存在していることがうかがわれます。

## 2. 貧困層の子どもと非貧困層の子どもの回答の違い

これまでの調査結果の説明のなかで、貧困層と非貧困層という所得階層別に回答に有意な差があったものを列挙すると次のようになります(以下の記述は「非貧困層の子ども」に比べての「貧困層の子ども」の特徴です)。

## A 子ども調査

### 1) 将来の夢

－将来の夢が「ない」の割合が多い。

### 2) 物品の所有

- －(小5)携帯電話以外のすべての物品項目で「欲しいのに持っていない」割合が多い。
- －(中2)小5と比べて差がある物品項目は少ない(自分だけの本、子ども部屋、インターネット・パソコン、勉強机などには差がある)。

### 3) 放課後の過ごし方について(相手、場所)

- －(小5)家族と一緒に過ごす割合が低い。場所では、塾が少なく友だちの家、公園が多い。
- －(中2)家族と一緒に過ごす割合は同じくらいであるが、「一人でのいる」割合が多い。場所では、自分の家が多く、学校(部活等)が少ない。

### 4) 友だち

- －(小5)特に「近所の友だち」「スポーツ、クラブの友だち」「塾の友だち」が少なく、「学校の友だち」が多い。
- －(中2)「友だちとたくさん遊んでいる」「友だちと仲良くしている」「友だちに好かれている」が少ない。

### 5) 会話

－(小5)「会話が少ない」割合が高い。

## 6) 食事

- －(小5、中2とも)一人で食べる割合が高い(孤食、特に朝食)。  
※所得階層別に母親の就労状況などがどのように異なっているかも検討する必要がある。

## 7) 学校生活

- －(小5)学校の授業を「楽しみではない」と答えた割合が高い(中2では観測されない)。「先生に会うこと」を「楽しみではない」と答えた割合は低い。

## 8) 子どもの自己肯定感

- －(小5、中2とも)以下のような自分に対する肯定的評価の割合が低い(「そう思わない」の割合が高い)。  
「頑張ればむくわれる」「自分は価値のある人間だと思う」「自分は家族に大事にされている」「自分は友だちに好かれている」「不安に感じることはない」「孤独を感じることはない」「自分の将来が楽しみだ」「毎日の生活が楽しい」。

## B 保護者調査

### 9) クラブ活動と習い事

- －(中2)クラブ活動への子どもの参加率が低い。
- －(小5、中2)習い事ではもっと差がある。

### 10) 就学援助費

- －該当せず。

### 11) 子どもとの進学に関する意識

- －(小5、中2)(大卒以上の教育に関して)「受けさせたい」「経済的に受けさせられない」に大きな差がある。

### 12) 家計と子どもへの支出

- －(小5、中2)大きな差がある。「1年に1回くらい家族旅行に行く」「学習塾に通わず」「習い事に通わず」など、「時間の過ごし方」に関する項目で、「経済的に与えられない」と答えている貧困層の保護者の割合が高い。

### 13) 子どもとの関係

- －(小5、中2)「よく会話をしますか」に差がある。
- －(特に中2で)「お子さんと十分に時間を過ごしていますか」に大きな差がある。
- －「お子さんの将来の夢を知っていますか」について差はなし。
- －「お子さんを信頼していますか」(あまり信頼していない)に差がある。

### 14) 医療サービスの受診状況

- －(小5)「過去1年間に医療機関で(お子さんを)受診させた方がよいと思ったが、実際には受診させなかったことがある」割合が高い。

## まとめ

以上から次のような「貧困家庭の子ども」像が浮かんできます。それらは、学校で、地域で、家庭でどのような教育的・福祉的配慮が必要かを考える際の基礎的素材を提供していると考えられます。

- 1) 家庭での会話や食事、放課後の過ごし方、友だちとの関係、学校生活という、子どもを取り巻く大きな環境である<家庭><友だち><学校>の3つの側面で、充実度が低くなっています。

2) 所得階層と学力との関係については先行研究が実証的に明らかにしていますが、本調査は、貧困家庭の子どもは自己肯定感(8)が全般的に低く、「頑張ればむくわれる」「自分の将来が楽しみだ」という質問に対する否定的評価の割合が多く、また、将来の夢(1)もない割合が高く、「希望格差」(山田昌弘)あるいは「意欲格差」が存在していることを示しています。今後どのようにして子どもの自己肯定感を高めるべきかについて議論していく必要があるように思えます。

3) そうした中で、小5の貧困家庭の子どもで「先生に会うことは楽しみではない」の割合が低いことが注目されます。このことは、今後の方向性を暗示していると思われます。また、クラブ活動への参加率が貧困家庭の子どもでは低いということも新たな発見でした。その背景をより詳しく議論していくことも必要であると考えられます。